砂と水と月の国で

橘　塔子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
砂と水と月の国で

【Ｎコード】
Ｎ５６６７Ｚ

【作者名】
橘　塔子

【あらすじ】
何時とも知れぬ時代、何処とも知れぬ世界、広大な砂漠は月の神に守護された王国によって統一されつつあった。繁栄を極めるその王都に、異国から美しい旅の楽師がやって来る。過去に因縁に持ちながらも名君と謳われる国王は、その楽師を雇い入れた。オアシスの国を舞台に、好奇心旺盛な末の王女と、真面目な属国の王子との成長を描く。
ファンタジーですが、超自然的なことはあまり起こりません…。

邂逅

砂漠の民に伝わる神話の中で最もよく知られているものといえば、オドナス王国起源に関するアルハ神の伝説だろう。アルハは月を司る神である。

遥か昔、広大なこの砂漠を渡る途中で方角を見失い、飢え乾いて砂に倒れた旅人がいたという。旅人はアルハ神への信仰がたいへん厚い人間であったので、ちょうど東の空から昇ってきたこの神はそれに気づき、瀕死の彼を憐れんだ。アルハの涙は天空に懸かる満月から滴り落ちて、その地に澄んだ湖を造った。それで旅人は命を取り留めた。

水で喉を潤した後、湖畔で感謝の祈りを捧げる旅人にアルハは告げた。

おまえの信仰心に報いるためにおまえの命を助け、この湖を与えよう。おまえが我を信仰する限り、我はおまえとおまえの血族を加護するだろう。子々孫々の代までこの地に留まり、この湖を守るがいい。

だが、おまえとおまえの血族が我の心に背き非道な行いをした時は。

その時は、この湖を黒く濁らせ波を炎に変え、再び砂の中に消すだろう――。

旅人はその地に留まり、水を求めて集まってきた人々をまとめて国を興した。

これがオドナス王国建国にまつわる伝説である。

「ひどうなおこないってどういうこと？」

父親の語る伝説を聞いて、少年は素直に疑問をぶつけた、

訊かれた父親は傍らの幼い息子に目をやって、優しく微笑んだ。

「裏切ったり嘘をついたり家族を傷つけたり、この国の人を不幸に

することだよ」
彼もまた息子と同じ年頃に父親へ同じ問いかけをし、やはり同じ答えをもらったことがあった。
「ふうん…」
少年は繋いだ父親の手を握り締めて、好奇心に満ちた黒い瞳を宙へ向けた。
石造りの高い天井に開いた大きな天窓から、ちょうど中天に懸かった丸い月が見える。月は濃い蜂蜜のような色をしているのに、そこから降り注ぐ光は冷たい銀色だった。
少年と父親の目の前、天窓の真下に当たる位置には白い立像があった。
月光を一身に浴びて佇むその像は、人間の等身大よりもやや大きい。身長と同じ高さの台座に乗っているため、下から眺める者はそれを仰ぎ見る姿勢になる。少年と父親もそうしていた。
月神アルハの像である。
緩やかに波打つ頭髪も痩躯に纏いつく長い衣装も、水を掬うような形で胸の前に掲げられた両手も、白い石で作られているとは信じられないほど精巧だ。月明かりが石に刻まれた陰影をくっきりと浮かび上がらせ、今にも息をしそうに見える。ひとつの国を造り、いずれ裁きを下すとされる神は、しかし優しげな表情で彼らを見下ろしていた。
何て綺麗なんだろう、と少年は素直に思った。お月様が人の形を取ったら本当にこんな姿になるんだろうか…。
「ちちうえ」
少年は頬を紅潮させて父親を呼んだ。
「いつかアルハ様に会えるかな？」
息子の声に幼いながらもひたむきさを感じて、父親はその場にしゃがんで目線を合わせた。
「アルハ様はいつでも月のお姿をして空にいらっしゃるよ。我々を見守って下さるのだ。もちろんおまえのこともね」

それから息子の肩に手をやって、立像に向き直った。
「もしアルハ様がこのお姿で現れたら、その時は――この国が滅ぶ時だ」
この湖を黒く濁らせ波を炎に変え――。
その光景を思い浮かべようとしたが、少年にはうまくいかなかった。物心ついた時から見慣れている青い湖が黒く濁って砂に沈んでゆくところなど想像できるはずもない。
父上にはそれができるのだろうか。だからいつも心を配って、皆が幸せになれるように自らの務めを果たしているのだろうか。
少年は再びアルハ神の立像を見上げた。
会うのは怖い。でも、本当に神様がいらっしゃるなら、会ってみたい。そう思った。

砂丘の連なりは金色の海原だった。
どこまでもどこまでも、視界の続く限り、世界の続く限り、日を浴びた金色のうねりが覆いつくしている。そしてびょうびょうと吹き付ける強い風が、その波頭の形を刻々と変えつつあった。遥か高み、鳥の目で見れば、ひとときも止まらぬその変化が見て取れたかもしれない。だが一片の雲もない明るい空を行く鳥はなかった。
明るい光に満ちた、不毛の砂漠――。
その海原を、ひとつの影法師が進んでいた。
砂丘から砂丘へ風とともに渡る細かい砂の粒を全身に浴びながら、ゆっくりと歩を進める者がいた。空の青と砂の金色しかない世界で、その姿だけが際立って異質に見えた。
全身をすっぽり覆うような木綿の長い上着は、砂漠の民の一般的な旅装束だ。吹き付ける砂から呼吸器官を守るために同じ木綿の布で頭部と顔を覆っているため、男か女かすらも定かではなかった。
背負った袋はたいして大きくもないが、その袋の上に何やら丁寧に布で巻かれた丸い包みが括りつけられている。それと、腰に携えた一振りの短剣――旅人の荷物はそれだけであった。果てがないよ

うに思えるこの砂漠で、旅人の存在はそれだけ――。
旅人の残した足跡を、瞬きをする間に風が掻き消してゆく。過去も未来も持たないような影法師でありながら、しかし旅人はひるむことなくしっかりとした足取りで焼けた砂の上を歩んでいる。
熱い風をよけてやや俯き加減になっていた旅人の顔が、ふと、上がった。
歩みが止まる。
旅人が今越えてきた背後の砂丘から、凄まじい量の砂が滑り落ちてきた。
「そこの！　止まれ！」
この地方の方言での怒号は、野太い声だった。同時に、人間のものではない足音。それも一つや二つではない。
旅人はゆっくりと振り返った。
砂丘の上から駱駝の群れが駆け下りてきていた。２０頭はいるだろうか。騎手はいずれも旅人と同じような格好をした男たち。ただ違うのは、全員が長い蛮刀や手斧を背負っていることだった。
彼らは瞬く間に旅人を取り囲んだ。金色の埃が波のように舞い上がった。
旅人は動かない――動けないのかもしれない。
やがて一頭の駱駝が前に進み出た。
乗っているのは大柄な体つきの男だった。まだ若いようだが、日に焼けた浅黒い顔は硬い髯に覆われている。髯と同じこげ茶色の目は、狡賢い獣のような光を帯びていた。
統制された駱駝の手綱さばき、護身用にしては大仰すぎる武器――砂漠に数多く存在する盗賊の一集団らしい。オアシス都市間を行き来する隊商を襲っては生計を立てている連中だ。
「こんなところを１人で歩いているとはな。隊商とはぐれたのかい？」
髯の男――盗賊団の頭目は旅人の全身を値踏みするように見下ろした。

旅人は答えない。顔のほとんどは布に覆われて表情が伺えないが、わずかに覗く両眼は明るい灰色をしていた。銀色――と言ってもいいかもしれない。

その瞳の色に気づいたのか、頭目は、

「異国人だな。これはいいもんをを見つけた」

と、笑った。

「異国人は高値がつくんだよ。おまえが商人か逃亡奴隷か知らねえが、こんな砂漠のど真ん中を一人で彷徨ってるんだ。干からびて死ぬより売られた方がマシだろ。来な」

頭目は腰につけた片刃の蛮刀を引き抜いて、駱駝から降りた。刃は分厚く、力でぶった切る粗暴な刀だ。持つ者のいかつい体型と相まって、その武器を振るう前にほとんどの相手をひるませてしまうだろう。

立ち尽くす旅人もそんな相手の一人と見て、頭目は警戒のない素振りで近付いて来た。もちろん他の仲間が標的が逃亡しないよう注意深く取り囲んでいる。

「ツラを見せな」

蛮刀が上がり、肩の高さで止まった。その先に旅人の顎があった。

顔を覆った布に、切っ先が触れる。

「傷物にはしたくねえ。大人しく…」

「…道を開けてくれないか」

一瞬、頭目の動きが止まった。発せられたその声が眼前の旅人の喉から出たと理解するまで少しかかったからだ。

武器を向けられている人間のものとは思えないほど落ち着いた、若い男の声だった。風の音にも消されず低く通る。

何だ男か、と落胆するより先に、頭目の神経をふと冷たいものが撫でた。戦いと略奪を繰り返してきた盗賊の太い神経を、だ。理由は分からない。

同じ感情を覚えたのか、取り囲む仲間がそれぞれに武器を抜いた。不穏な空気が流れる。

それを掻き消すように、頭目は声を上げて笑った。
「いい度胸だ！　それともただの馬鹿か？　いいからツラ見せろ！」
蛮刀の切っ先が横なぎに動いた。もし旅人が怯えて身をかわしたりしていたら、その顔か喉元に切り傷がついていたかもしれない。
だが旅人は微動だにしなかったので、布だけが裂けて風に流れた。
あらわになった旅人の顔を見て――頭目の笑いが凍りついた。大きく両眼が見開かれる。
同時に、仲間たちも動きを止めた。
こいつ…こいつは…。
「…こりゃあ驚いた…お、おまえにはどんな高値がつくか…」
頭目は蛮刀を引いて手を伸ばした。旅人の漆黒の髪が揺れている。
誰が命じた訳でもないのに、仲間たちも次々に駱駝から降りた。本能で火に引き寄せられる羽虫のごとく、円の中央に立ち尽くす旅人へ向かう。乾ききった砂漠の空気が、にわかに妖しい湿度を帯びたようだった。
旅人は動かない。腰の短剣に手を伸ばすこともない。
ただ――銀色の両眼がわずかに細まった。
頭目のごつい手が、旅人の肩に触れようとしたその時――新たな足音と砂塵が沸き上った。
盗賊たちが現れたのとは逆方向、これから旅人が向かう砂丘の頂上で。
背を向けていた頭目は弾かれたように振り返った。
「その人から離れろ！　犬どもめ！」
風を切り裂いて吹き降ろした声は、まだ声変わり前の少年のものだった。
数にして盗賊たちの倍、数十騎の駱駝が砂丘に並んでいる。金色の砂と青い空の境界に立つその背に乗った者たちは、皆鮮やかな緋色の装束に身を包んでいた。騎乗でも扱いやすい中程度の長さの剣を携えている。
彼らの中央に、先ほどの声の主らしい、すらりとした小柄な騎手

がいた。
「くそっ…」
頭目は低く唸って、自らの駱駝に戻ろうとし、その前に旅人の腕を掴んだ。
いや、掴もうとした。拳は空を握っていた。そこにいたはずの旅人は、身じろぎひとつしていないように思えたのに、いつの間にか身長分ほどの距離を取っていたのである。
その距離を追うには事態は余りにも切羽詰っていた。頭目は舌打ちをしたが、次の瞬間緋色の騎手たちから矢が放たれて、慌てて駱駝に走り戻った。
騎手たちが剣を振り上げて砂丘から駆け下りてくる。
数の上で圧倒的に不利と見て、盗賊たちは潔く逃げに回った。慣れた手綱さばきで砂丘を駆け上がる。
「逃がすな！　今日こそ一匹残らず討ち取ってやる！」
少年の叱咤で、緋色の騎手たちは激しく追撃した。駱駝の足音と剣を打ち合わせる金属音と、男たちの怒号が砂を蹴散らした。
「小僧！　この借りは返すぞ！」
頭目は右手の蛮刀で敵を薙ぎ払いながらそう叫んで、それでも未練を込めた眼差しを旅人に送って、仲間たちとともに砂を撒いて走り去った。
緋色の騎手たちは3分の2ほどが追撃に回り、残りの十数騎がその場に残った。
実に統制の取れた動きだった。盗賊とはまったく違う、訓練された兵士の動き。
そしてこの４０名もの大人を指揮したのは――。
「旅の人、怪我はないか？」
遠ざかってゆく盗賊たちと自らの兵団を視界の隅に置きながら、少年は旅人に声をかけた。
大人びた口調だが、見たところ歳の頃はまだ１１、２歳。赤銅色の肌と夜空色の瞳。砂漠の厳しい環境を生きる者らしく精悍で端正

な顔立ちは、まだあどけなさを強く残している。他の大人たちと同じ鮮やかな緋色の装束だが、少年が頭に巻いた同色の布には金色の刺繍が施されていた。
「今のはこの辺りを縄張りにする盗賊の一団だ。殺す盗む犯すのたちの悪い連中だ」
盗賊たちとはまた別の特徴を持つ発音でそう言いながら、少年は剣を鞘にしまって、駱駝の首を軽く叩いた。大人しく跪いた駱駝から軽やかに降りてくる。
「無事でよかった。言葉は分かるか？…」
問いかけて、少年の唇が動きを止めた。初めて、旅人の顔を正面から見たのだ。
「…助けてくれてありがとう。礼を言う」
旅人は微笑んだ。静謐に――今までの喧騒などなかったかのように。
その顔は実に美しい作りをしていた。
２０代半ばの青年である。灼熱の日差しを浴びながらその肌は象牙のように白い。すらりと通った鼻筋、ごく薄い朱色を帯びた唇、そして長い睫毛に縁取られた二つの目は銀細工の色をしている。
砂漠の夜を冷たく照らす月が、怜悧な銀色の三日月が人の形を取ったようだ、と少年は思った。彼が思いつくいちばん美しいものがそれだったからだ。
「…異国の人だな。ま、まさか一人でこの砂漠を？」
少年は冷静を装いながら言った。同性を美しいと思うことがとても罪深く感じられたからだ。しかし目は逸らせない。
旅人は肯いた。
「北の方へ行くつもりだ」
「歩いてか！？　そんな無茶な…」
少年は言葉を切った。この男にとっては無茶ではないのかもしれない、現にこの砂漠の真ん中をこうして歩いているではないか。隊商はおろか駱駝の一頭も連れず。

少年は少し考えて、旅人をぼうっと眺めている部下の一人に何やら指示を出した。心ここにあらずといった風情を咎める気にはならなかった。
「なら、せめてこれを」
少年は部下から受け取った袋を旅人に差し出した。羊革製の、水の入った水筒である。
旅人は目礼し、それを手に取った。
「お心遣い感謝する」
「北へ行くのならオドナスの領土を通ることになる。あの大王国は交易が盛んで異国人に寛大だ。安心して行くといい」
それは、ここ１０年ほどで急速に領土を広げてきた国の名だった。点在するオアシス都市国家を次々と併合している。砂漠の北の果てにそそり立つ急峻な山脈から、南は海岸線まで、この乾いた大地の全域を掌握しつつあった。
少年の言葉にわずかな口惜しさの響きを感じ取って、旅人は優美な眉根を寄せた。
「あなた方はオドナスの兵ではないのだね」
「違う」
少年は即答した。
「我々はロタセイの民」
砂漠の東部、ごく低い草が生い茂る土地で暮らす遊牧民である。家畜を飼う他、砂漠を行く隊商と交易をしたり、また彼らの警護を引き受けることもある。今回の盗賊狩りもその一環であったのだろう。
その衣装の鮮やかさと誇り高い民族性から『緋色の勇兵』とも呼ばれていた。
「俺はロタセイ王の息子だ。オドナスがどれだけ縄張りを広げようとも、我々の手の届く範囲は我々で守る。これまでも、これからもだ」
「ご立派なお志だ、若きロタセイの戦士よ」

旅人の賛辞には微塵の厭味も下心も、また子供に向けた適当なあしらいも感じられず、少年は焼けた頬に笑みを浮かべた。
このわずかなやり取りの間に、彼は旅人に好感を持った。だが――砂漠を行くものは一瞬たりとも立ち止まらない。深い絆など求めてはいけないのだと、この歳でもよく分かっていた。
「では…道中お気をつけて。あなたの旅がよい水とよい風に恵まれますように」
砂漠での別れの挨拶だった。旅人は黙って頭を下げた。
――砂塵を蹴散らして遠ざかってゆくロタセイの騎手たちを見送って、旅人は足元に落ちた布を拾い上げた。
砂を払って、風に乱れた髪をまとめるように頭部に巻きつける。
「…あなたの瞳が輝きを失わぬよう」
呟きは祈りに似ていた。
再び歩き出した先の空は、もう夕暮れの赤い色に染まっていた。
もうあとわずかで、砂が血の色に染まる時間だ。

遯逅（後書き）

初めてファンタジーを書きます。
あまり重くならないように気をつけますが、少し暗めになるかもしれません。
ご感想頂けると嬉しいです。

将軍と歌姫

3年後――。

オドナスの将軍シャルナグは、広場で見慣れぬ楽器を演奏している辻音楽師が気になっていた。

粗末な服に身を包んだその楽師が手にしているのは、無花果を縦に割ったような形の弦楽器だった。それを膝から肩へ凭せかけて、短い弓で4本の弦をなぞっている。優美に伸びた無花果の先端で、左手の長い指が複雑に弦を押さえていた。人の声に近い音域の、ふくよかで艶のある、しかしどこか寂寥とした音色の楽器だった。

奏でている曲も異国の音楽のようだ。交易が盛んで多彩な文物に溢れたこの都の人々が、最初は物珍しげに足を止め、やがてうっとりと聴き入っている。

数日前に通りかかった際に耳に飛び込んできた音楽は、将軍の心にも不思議なくらい響いた。いつも店を出している露天商に訊けば、3日ほど前からここで演奏しているのだという。それからもう6日、将軍は毎日その演奏を聴きに足を運んでいた。

広場の中央では国内外の商人たちが市場を形成している。賑やかな物売りの声、甘くむせ返るような果物の匂い、家畜の鳴き声、銀製品のきらめき――それらすべてを明るい青空と生い茂る熱帯の植物が包んでいる。この砂漠最大のオアシスの恵みで、この都では水と緑には事欠かない。

そこかしこで大道芸人や辻音楽師が客を集めていたが、この不思議な弦楽器の楽師には敵わなかった。広場の片隅の石段に腰を下ろした楽師の前には、いつしか数十人の人だかりができていた。

楽師はひとしきり甘く切なげな旋律を奏でると、最後の余韻を長く響かせて弓を止めた。

客の唇から一斉にため息が漏れ、次の瞬間大きな拍手が湧き起こった。

「何ていう楽器だい、そりゃ？」
「異国の曲かね。もっと弾いてくれよ」
楽師の足元に広げてある袋に硬貨を投げ入れながら、客たちは口々に言った。
「では今度は、北の国の曲を」
楽師はそう言って笑ったように見えた。フードを目深に被り、鼻から下を薄い布で覆っているので実際の表情はよく分からない。
再び、弓が弦の上を滑った――。
楽師が歌うことはない。それなのに、聴く者の脳裏には北国の冷たい雪と風が、荒涼とした凍土が、火を囲んで集う人々の踊りが、短い夏の柔らかな陽光が、鮮やかに浮かぶのだった。
シャルナグは少し離れた場所で目を閉じてそれを聴いている。今年４０歳になった彼は、まさに大国の王軍を預かるに相応しい堂々とした体躯をしており、顔立ちもいかつく頬は髯に覆われている。そんな黒獅子のような容貌の彼が眉間に皺を寄せて目を瞑っているものだから、通行人が避けて通った。
「またそんな恐ろしいお顔をして、シャルナグ様、皆が怖がりますわ」
傍らに佇んでいた女があきれたような口調で言った。刺繍入りの麻の衣装を身に纏った若い女だ。オドナスの民よりももっと色素の濃い肌をしており、縮れた長い髪を頭頂で丸く結い上げていた。
シャルナグはうむと唸って目を開けて、
「どう思われる、キルケ殿？　あの楽師の演奏」
「シャルナグ様のおっしゃる通り、とても素晴らしいですわね。少し怖いくらい。弾いているのは本当に人間かしら？」
キルケと呼ばれた女は演奏に合わせて軽く鼻歌を歌う。やや低音の声が心地よく響いた。
「あの楽師は魔物か何かだと？」
「冗談ですわよ」
「うむ、冗談か。では陛下の御前で演奏させるに値するだろうか？」

キルケは首肯した。
「将軍閣下の耳は確かです」
「ありがとう。今日はあなたに来てもらってよかった」
強面の将軍の笑顔は、意外なほど人懐こかった。
楽師の演奏が終わると惜しみない賛辞と銀貨が振り注いだ。彼はいつもほんの数曲披露するだけで立ち去ってしまう。今日もまた、あまり愛想を振りまくこともなく、初日の１０倍ほども溜まった銀貨をしまいつつ立ち上がった。もっと聴きたげな聴衆に会釈をして楽器を脇に抱えた。弓も本体に差し込める作りになっているようだ。
シャルナグは意を決して彼の後を追った。
「楽師殿！」
広場から大通りに繋がる出口の所で呼び止めると、楽師はゆっくりと振り返った。
フードの下で銀色の眼差しが薄く光っている。冷たい色だが酷薄な感じはしない――。「素晴らしい演奏だった、楽師殿。貴殿のことは都で評判になっている」
「ありがとうございます。６日前からいらっしゃっていましたね」
楽師の言葉にシャルナグは驚いた。いくら自分が大男とはいえ、あの群集の中で見分けられていたとは。それともこの楽師は聴衆１人ひとりの顔を記憶しているのだろうか。
「私に何か？」
「うむ。私はシャルナグという。このオドナスで王軍を預かる将軍職に就いている。決して出自の怪しい者ではない。無礼を承知で申し上げるが、ぜひ貴殿を我が屋敷にお招きしたい」
大国の将軍が一介の辻音楽師に対してあまりにも丁寧な物言いであった。現王の軍事における片腕として領土拡大に最も貢献した武人でありながら、たいへんに生真面目な性格の持ち主である。何かしら自分よりも優れた才を持つ相手に対しては、身分に関係なく敬意を表した。
「ご同行頂けるだろうか？」

「喜んで――」
楽師は目深に被ったフードと顔の薄布を取った。
「サリエルと申します。私のような者が将軍閣下にお目通り叶うなど、光栄の至りです」
「お…」
シャルナグは思わず声を出した。戦場でも滅多に見ることのできない将軍の動揺である。
そこに光が生まれたかと思うほど、楽師は美しい容貌をしていた。銀細工の両眼に透き通る滑らかな肌、遠く西方の彫像を思わせる端整な顔立ち、それを縁取る豊かな黒髪。
「これはまた…ますます人間離れだわ」
将軍に付き添っていたキルケが小さく呟いた。感嘆というより呆れたふうな口調だ。
彼の美貌に気づいた広場の群集がざわつき始めた。シャルナグは我に帰り、騒ぎになる前にと楽師を通りへと連れ出した。

オドナス王国はこの砂漠全域を統一した初の王国だった。
もともとはオアシス都市国家の一つに過ぎなかったのが、今の王に代が変わって２０年、あっという間に領土を広げ、東西の交易でもたらされる莫大な富を掌中にした。
その急速な繁栄の要因は、強力な軍事力もさることながら、現王の卓越した政治手腕にあった。
オドナスに逆らう国々への侵攻は苛烈を極めたが、統治を受け入れた者たちへの待遇は実に寛大だった。都から知事を派遣しつつも基本的に自治を認め、自由な商業と文化や宗教を守ることを約束した。その一方で、隊商を狙う盗賊団の討伐にも力を注ぎ、いくつもの盗人の首が都に晒された。砂漠に点在しながら細い交易の糸で繋がっていた国や部族を、オドナスがまとめあげて太く強靭な道を敷いたのだ。何も生み出さない砂漠の地は、今や多くの人と物と金が行きかう海となっていた。

オドナス王はまた、統治する部族の若者たちを、客人として王都に招いた。そして自分の目の届く所で教育を受けさせた。もちろんこれには統治する諸国からの人質という意味もあるが、柔軟な若者の心にオドナスの優れた文化を植えつけ、将来的に彼らの祖国にそれを持ち帰らせるという意図があった。今のところ国内に多様性を認めてはいるものの、いずれは文化的にもひとつにまとめあげてより強固な国家を目指すというのが、王の長期的な戦略である。

併合された部族にとっては為政者の都合で押しつけられた平和とも言えよう。ともあれ砂漠は一人の強力な王の元で繁栄を享受しつつあった。

都市国家であった頃は街そのものがオドナス王国の本体だったので、領土が広がった今日でも王都に特定の呼称はない。

しかしその命の源であるオアシスは、『アルハ神の恩寵』を意味するアルサイ湖と呼ばれていた。

砂漠で最大の面積と水量を誇るこの湖は、神話が示す通り、河川もなく雨も降らない灼熱の砂の中に突如として現れる。一説によると、遥か北方にそびえる山脈の雪解け水が伏流となり、この地に運ばれ湧き出しているとも言われているが、正確なところは分かっていなかった。だが５０万人余りの王都の人口に十分な水を供給し、それでもなお青い水を満々と湛えて減ることはなかった。

アルサイ湖の周囲にはここが乾いた大地であることを忘れさせるほど濃い緑が生い茂り、畑や果樹園で作物が栽培された。もちろん漁業も盛んで、上がった淡水魚や貝類は毎朝街の市場に並んだ。

王都の市街地はオアシスの南の縁に広がっていた。高度な技術をもって張り巡らされた水路は血管のようで、街中に澄んだ水を供給した。そのおかげで砂漠の中にあって都は適度な気温と湿度を保ち、豊かな緑が涼しい木陰を旅人たちに提供していた。

時に砂中のエメラルドと称されるに相応しい、美しく豊かな都である。

街は水路に沿って格子状に整備されていた。中央に市場の立つ広場があり、そこからいちばん広い通りが東西南北に伸びる。道沿いには多くの商業施設や旅人相手の宿屋が立ち並び、この国の繁栄を見せつけていた。大通りから奥へ入ると、都人たちの居住区があった。白い土壁でできた低い家々がひしめき合う。路地では子供が遊びまわり、それを叱りつけて女たちは井戸端で炊事をし、物売りが賑やかな声を張り上げた。雑然とした、しかし平和な生活が垣間見える。

広場から南北に伸びる通りを北へ進むと、やがて白い壁に囲まれた巨大な建物が現れる。その後ろはすぐアルサイ湖だ。

青い湖面を背にして、街へ水を送り出す水門を守るように建つその建物こそ、このオドナスの王宮であった。

サリエルと名乗った楽師が連れて来られたのは、格子状の街のかなり北部、王宮にも程近い場所だった。

この区域は一般の居住区と違い、広い敷地に建つ大きな屋敷が多かった。人通りも少なく、閑静な印象を受ける。

シャルナグは、その中でもひときわ立派な門を持つ屋敷にサリエルを案内した。門の両脇には使用人というにはあまりに屈強な佇まいの男が剣を携えて立っていたが、将軍を見ると背筋を伸ばして深く頭を下げた。オドナス軍から選び抜かれた精鋭なのかもしれない。

背の低い潅木が手入れされた塀の内側は広々として、葉の大きな木々が爽やかに茂っていた。庭にも水を引いているのか、せせらぎの音がする。足元には滑らかな黒い石をつないで歩道をしつらえてあった。奥に立つ屋敷は白い壁に鮮やかな彩色がしてある。壁や屋根に凝った意匠を施せるのは裕福な証拠だった。

玄関前で数名の使用人が主人を待ち構えていた。玄関といっても、砂漠の気候柄、扉のようなものはない。麻で織り上げた布が垂れ下がっている。昼間は両脇で束ねられ、風通しをよくしていた。

シャルナグは使用人たちに来客を告げ、サリエルとキルケを先に

案内させた。
彼らは客間のような広い部屋に通された。調度品はあまりないが、柔らかな絨毯の上に低い長椅子と黒檀のテーブルがある。テーブルには円い香炉があって、薄い香りがたゆたっていた。玄関と同じく部屋の仕切りは様々な色合いの布で、庭から吹き込む湿度を含んだ微風が心地よかった。
長椅子に少し離れて座ると、キルケは微笑を浮かべてサリエルを眺めた。切れ長の目ときりりとした眉が印象的な、どこか中性的な美しさを持つ女であった。歳はサリエルと同じ２０代半ばか、少し上に見える。
ここまで来る道すがら、シャルナグはサリエルに彼女を紹介していた。王宮付の歌手でその容貌から『オドナスの黒い歌姫』と称される当代きっての実力の持ち主であるという。
「…あなたが顔を隠していた理由が分かるわ」
歌姫の地声はどちらかといえば低音だった。低く囁くような、耳に心地よい声。
サリエルは肯いて手にした楽器を撫でた。
「余計な面倒ごとに巻き込まれるのは避けたいので」
「まあそうでしょうね。演奏にお金を払う前に、あなた自身を買おうとする者達が殺し合いを始めるかも」
物騒な台詞を吐きながらも、彼女の口調はどこか楽しげだった。
程なく――紺色の麻布を潜って、この屋敷の主が姿を現した。
「お待たせしたな」
部屋着に着替えたシャルナグ将軍は、立ち上がろうとした楽師を止めて、自分も彼らの向かいに腰を下ろした。
２人の侍女が入ってきて、手早くテーブルに瓶と杯を並べた。この地方でよく飲まれる山羊乳で作った酒だ。客のもてなしの定番である。
酒瓶を持つ侍女たちの手が震えていることに気づいて、シャルナグは彼女らの手から瓶を取った。このままではテーブルに酒をぶち

まけられる羽目になると考えたからだ。それでも客人に見とれていることを咎めはせず、シャルナグは彼女らを下がらせた。
「何と言うかまあ…これほど綺麗な男がこの世にいようとは」
シャルナグは正直すぎる感想を口にして溜息をついた。
サリエルは臆するでもなく少し笑った。白い歯並びが薄い色の唇から覗いて、シャルナグは無意識に目を逸らした。
将軍が手ずから2つの杯に酒をつぐと、サリエルはそれを恭しく手に取って、彼らは乾杯した。歌手であるキルケは喉のために酒類は口にしないらしい。
爽やかな酸味のある酒を飲み干してから、シャルナグは訊いた。
「貴殿は見たところ西方のご出身らしいが、オドナスにはいつ来られた？」
「都に参ったのはは10日前です。その前は、ここより遥か北方、雪山と氷海の国を旅しておりました」
「北方…天気のよい日に見える山脈の辺りか？」
「さらに北でございます。人の住む陸地の果て、そこより先には海に浮かぶ巨大な氷しかありません」
「貴殿も彼の地の生まれなのか？」
「いえ…私に故郷と呼べる土地はございません。故あって、物心ついた時からこうしてさすらっております」
その故というのを尋ねたかったが、楽師は答えない気がした。旅人たちには様々な目的と理由があり、深くは問わないのが交易都市の掟だった。
「その楽器は何という？　ウードに似ているが弓で弾くのは始めて見る」
「前の持ち主はヴィオルと呼んでいました。西国の楽器職人の手によるものです」
シャルナグは再び溜息をついて、背もたれに体を預けた。
私の半生はこの砂漠の端から端までを駆け回っていたが、この美しい男はさらに外側の世界を見知っているのだな――。

「…サリエル殿、貴殿の腕と旅の経験を見込んでお願いがある」
「どのようなことでしょうか？」
「うむ、今日、キルケ殿の賛同が得られて腹が決まった。貴殿を王宮にお連れしようと思う。王の御前でその素晴らしい楽の音を献じては頂けないか」
　サリエルはすぐに答えなった。美しい表情からは感情が読み取りにくいが、シャルナグはその沈黙を戸惑いと取った。
「王は私などとは違い芸術に明るい方だ。きっとヴィオル…だったか？　その音がお気に召すことと思う。そうなれば貴殿は宮廷楽師として召し抱えられるだろう」
「それは誠に光栄ですが…よいのですか、私のごとき素性も定かでない旅の者など」
　サリエルは少し声を低くした。
「王に仇なす敵国の刺客やもしれぬというのに」
　聞いていたキルケが、少々わざとらしく「まあ」と声を上げたが、シャルナグは明るく笑い飛ばした。
「それが狙いなら、最初からその美貌を晒すだろう。楽器など奏でずとも自然と王宮かそれに近い所から声がかかっただろうに」
　それにこの男は異質だ――そう将軍の勘が告げていた。焼けた砂を渡って来たにも関わらず、この清澄さと恐れのなさ。明らかに外の世界から来た異物だ。我々の国とまったく関係のない遥か彼方から。
　だからこそ、王の近くへ置いても安全だと思えた。
「オドナスは現王セファイド陛下の御世になって２０年、急速に領土を拡大してきた国だ。今ようやく国内が落ち着き、外交と内政の整備に力を注いでいるところだ」
　サリエルは肯いた。
「僭越ながら、この都はとてもよくできた街です。いろいろな国の都を見て参りましたが、ここほど平和で活気に満ちた場所は他に知りません。それに広場で演奏をしていて、ただの一度もたちの悪い

連中に絡まれたりしなかった。治安の良さには目を見張ります」
「オドナスの民はアルハ神に恥じない生き方をするよう幼い頃から教育されるからな」
　将軍の言葉はどことなく誇らしげだった。
「だがまだまだ我が国は人の層が薄い――あらゆる方面においてだ。内外から優秀な人材を集めねばならんのだ」
「楽師など、他にいくらでもおりましょうに」
「演奏が素晴らしい上に、砂漠の外を巡り歩いた楽師はそうはいない。陛下は外世界の様子を聞きたがっておいでだ。きっと貴殿を厚遇なさると思う」
　サリエルは長い睫毛を伏せてしばし考え、キルケはその横顔を窺った。謙遜はするが自分を卑下している素振りはなく、醸し出す雰囲気も優雅な青年だ。ふと、気になった。
「あなたのその容貌、物腰…もしかして、どちらかの国で身分のあるお方なのでは？」
「それは違います。私は身分や権力には最も遠い立場の者」
　彼は即答した。口元に苦笑に似たものが浮かんでいる。
「――かしこまりました。オドナス王に楽の音を献じます」
　シャルナグはほっと胸を撫で下ろした。

国王と王女

オドナスの第3王女リリンスは、その日、朝からとても機嫌がよかった。

毎日朝食後に出されるコダヌ――木の根を煎じた苦い飲み物で美容と健康にいいらしい――を今日は文句を言わずに全部飲んだし、苦手な礼儀作法の授業も、厳しい教師に腹を立てることなく今日は一生懸命に励んだ。

昼近くになって授業が終わり、教師がリリンスの部屋を退出すると、彼女は大きく伸びをしながらあくびをした。今出て行った教師が見たらさぞかし落胆するだろう。

「姫様、そんな大きなお口を開けて…蝿が飛び込みますよ」

侍女のキーエが呆れたように言う。

「口開けないとあくびできないでしょ。ね、あれ出しといてね、こないだ新しく作ったお衣装。夜に着るんだから」

14歳の王女は涙の溜まった黒い瞳をキラキラと輝かせながらにっこりした。

「はいはい、あの茜色のお衣装ですね。昨日からもう何度も仰せつかっていますよ」

「そうだった？　だって今夜は兄様が6ヶ月と26日ぶりにお戻りになるんだもの。綺麗にしとかなくちゃ」

「本当に姫様はアノルト様が大好きですのね。今日のように姫様のご機嫌がよいとキーエも助かります」

「私はいつもと同じよ」

リリンスは明らかに弾んだ声で答えて、椅子から飛び降りた。鏡台の前までぱたぱたと走って行って、くせのないまっすぐな黒髪を櫛で梳いた。

「お腹空いたなあ。今日のお昼は何かしら」

黙って立っていれば、どこから見ても可憐そのものの少女である。

大きな円い目が印象的な顔立ちは幼いながらに美しく、あと数年のうちに大輪の花を咲かせるであろう蕾のような清純さを漂わせていた。
だがそれは黙っていればの話であって、
「最近便秘気味なのよ。ほら、ニキビ！　毎日コダヌ飲んでるのに何でかしらねー」
およそ王女らしくない物言いに、キーエが頭痛を抑えるように額に手をやった。
「…午後からは農場にお出かけなんでしょう？　おぐしを結いましょうか？」
「ベール被ってくからこのままでいいわ。農務大臣と一緒に、アルサイ湖の北の方の農場を視察するのよ。舟に乗ってくの」
前々から農場が見たいと熱望していた好奇心旺盛なリリンスに対し、ようやく父王の許可が出たのだった。大臣が同行するとはいえ、王女が農業の現場に足を運ぶなどこれまでなかったことである。
リリンスはもう一度鏡を覗き込んでから、鏡台の隣に吊るした鳥籠に目をやった。中には鮮やかな赤い色をしたインコが一羽、止まり木に留まっている。リリンスに気づくと餌をねだるようにさえずった。
彼女は陶器の餌箱から小麦の粒を掌に出して、ぱらぱらと籠の中に入れてやりながら、
「大臣はね、もっと農場を拡げて作物を輸出に回すべきだと言うの。私はそれってどうかと思うんだけど…都の人たちが食べるには十分な料が収穫できてるわけだし、これ以上作地面積を拡げるのはアルサイの水の無駄遣いじゃない？」
「難しいことは分かりませんけれども…きっとお父様が正しいご判断をなさいますわ」
「私もちゃんと見ときたいの。それがただでごはん食べてる者の責任だと思う」
リリンスが意外なほどきっぱりした口調でそう言い切った時、部

屋の入口に吊るした目隠しの麻布を跳ね上げるようにして、別の侍女が駆け込んできた。
「ひ、姫様！」
「何ですバタバタと」
「どうしたの！？」
後輩の落ち着きのなさに眉を顰めるキーエをよそに、リリンスは露骨に顔を輝かせた。騒ぎや事件が大好きなたちなのだ。
侍女は胸を押さえて呼吸を整えながら、
「シャルナグ将軍が国王陛下への謁見におみえなのですが…推薦する楽師様をお連れになってて…それがすごく素敵な方なんです！もう目の覚めるような美男子で！」
「うっそ…」
「今、回廊においでです」
「でかした！　見に行くわよ」
リリンスは衣装の裾を持ち上げて、侍女よりも先に部屋を飛び出していった。

その日王宮は、見慣れぬ旅の楽師を迎え入れて、静かで異様な興奮に包まれていた。
王都の最北端、オアシスを背にして建つオドナスの宮殿は、白い壁に深い青の彩色を施した美しい建物だった。規模は将軍の屋敷の２０倍はある。建物は数多くの棟に分かれ、将軍宅と同じ高価な黒い石で作られた回廊がそれぞれを繋いでいる。建物の入口と部屋の仕切りはやはり薄布だが、光沢のある絹に細かい刺繍の施された豪華なものだった。
オアシスの潤沢な水で広い庭園には植物が溢れ、あちこちから鳥のさえずりが聞こえてくる。燦々と降り注ぐ陽光に露を含んだ緑がきらめき、甘い花の香りが漂う回廊を、その異国の楽師は静かに進んでいった。
先導するのはシャルナグ将軍である。今日は総髪を結い上げて、

絹の正装に身を包んでいるが、腰に巻きつけた太い皮帯には長剣が携えられていた。王宮で帯刀が許される数少ない人物だ。
若い楽師は白地に銀糸をあしらった衣装を身に着けていた。将軍宅の熟練の女中頭が選びに選んで誂えた布地だ。右手には無花果に似た形の弦楽器を抱えていた。
その楽師の美貌を聞きつけて、回廊が繋ぐ建物のそこかしこから宮廷人が顔を出した。貴族や役人、王の愛妾もいる。彼らは楽師の姿を目にすると、例外なく感嘆の溜息を漏らし、それから会釈もせずに慌てて顔を引っ込めた。
シャルナグはそんな人々に威嚇するような視線を投げつつ、
「悪く思わんでくれ。いつもはこれほど不躾でも腑抜けでもないのだ」
と、注目の的の麗人に詫びた。
サリエルは無言だが気にしている様子はない。慣れているのだろう。自覚があるのかないのか、とにかく神経は太い男だ、と、この2日間同じ屋根の下で生活してきたシャルナグは思った。
将軍の屋敷に招待されてから2日の後に王に謁見が叶うことになり、今日ここにやって来たわけだ。
回廊のいちばん先にひときわ巨大な建物があり、そこがオドナス王の居住部分だった。宮殿の中で唯一、砂漠の統一後に改築された建物である。同じく紺色に彩色された壁には波の模様のレリーフが施されている。遠く西方から呼び寄せた職人が腕を振るった。
その精緻な模様から、この建物は『風紋殿』と呼ばれていた。
入口を入ってすぐが謁見室だった。
王の謁見時間は午前中と決まっていて、楽師が本日の最後だった。すでに前の者は反対側の出口から部屋を後にしている。
「シャルナグ将軍閣下、お待たせいたしまし…た…」
呼び出し係の若い役人は、シャルナグの傍らの楽師を見て固まってしまった。
将軍はそんな反応を気にも留めず、立ち尽くす役人の傍らを通っ

て中に入ろうとしたが、我に帰った役人が慌てて止めた。
「し、失礼を。陛下は中庭でお待ちです」
「中庭で？」
「はい、将軍ご推薦の楽師の腕前を、他の皆にも聴かせたいとおっしゃいまして。正妃様はじめ大勢がお集まりです」
シャルナグは分厚い唇を歪めた。優れた楽師であれば本当に厚遇するだろうが、そうでなければ満座で恥を掻かせて追い出すつもりなのだ。
いつもながら子供っぽい真似をなさる――王をよく知るシャルナグは少し呆れた。サリエルが動じていないのが頼もしかった。

謁見室には入らずに役人の先導で来た道を引き返してゆく楽師と、一瞬目が合ったような気がして、リリンスは慌てて柱の陰に顔を引っ込めた。
庭の東屋にはリリンスをはじめ数人の侍女たちが群れていた。
「今こちらをご覧になったわ！　ね姫様、素敵な方でしょう？」
「いろんな方が謁見にいらっしゃいますけど、あんなに綺麗な殿方は初めてですわ」
侍女たちが声を潜めて、けれど興奮を抑えきれないように口々に言う。
リリンスも頬を紅潮させて、
「ほんと、これは当たりね。もう楽器の腕とかどうでもいい。立ってるだけで十分！」
「大丈夫、腕も確かですよ。きっと姫様のお気に召します」
彼女らの後ろからひょいと顔を出したのは、キルケである。
「キルケ！　来てたのね」
「ごきげんよう姫様。さっそく彼に目をつけられましたね。さすがに趣味がよろしいわ」
歌姫は口元に手を当ててくっくっと笑った。
オドナスきっての歌手であるキルケは王宮への出入りも多く、リ

リンスとも顔なじみだった。さっぱりした性格のキルケを、リリンスはまるで姉のように慕っている。
「あの人のこと知ってるの？」
「はい、シャルナグ将軍とともに彼を推挙したのはこの私ですもの」
「ど、どこで見つけてきたのよ？」
「街の広場で。辻音楽師をしていましたから」
凄まじく目立っただろうなあと想像するリリンスの背を、キルケは軽く叩いた。
「さ、私たちも中庭へ参りましょう。陛下から召集がかかっております。キーエが姫様を探し回っていましたよ」

黒い石の回廊に囲まれた中庭には、数十人もの宮廷人が集まっていた。
先ほど謁見室へ向かうサリエルを見物していた顔も見えるが、全員が好奇と期待の眼差しを向けている。
それぞれ役職をもった貴族や高官なのだろう。ほとんどが砂漠の民だったが、中には異国人と思われる髪や肌の色をした者もいた。身なりからして前の方にいるのがより身分の高い貴族、後方に下級官吏や兵士、女官たちといった具合だった。
そして、正面の建物から張り出した広縁に、オドナス王その人がいた。
大きめの肘掛け椅子に悠然と腰掛ける男――上質な濃紺の絹で作られた衣装が簡素なのは、彼がこの宮殿の主だからだ。その証拠に、椅子の後ろに並ぶ役人は例外なく正装している。歳は将軍より少し下、３０代後半だろう。浅黒い肌に短い黒髪、彫りの深い顔立ち。目も鼻も口も大きく伸びやかで、理知的で明るい印象だった。
将軍が獅子なら、王は鷲を思わせる風貌だ。
広縁の奥には、鮮やかな色合いの衣装に身を包んだ女たちが１０名余り、それぞれ長椅子や敷物の上に腰を下ろして中庭を見下ろしている。そこだけ花が咲いたように艶やかだ。王妃と、王の愛妾た

ちである。
後方にはリリンスの姿もある。今駆け込んできたところらしく、少し息を弾ませているようだった。
「国王陛下にはご機嫌麗しく」
シャルナグが跪いて挨拶すると、王は手にした長い煙管を面倒臭そうに振った。
「何を今更堅苦しい。昨夜も一緒に飲んだだろうが」
よく通る快活な声だった。この声で指揮される兵士は、高揚と安堵の中で戦えるだろう。
「外の騒ぎがここまで聞こえておったぞ、シャルナグ。貴様、何者を連れて来た？」
「陛下、事前の報告では北方から参った楽師で…」
背後の役人の説明を遮って、国王は将軍の隣に控える楽師に直接声をかけた。
「頭を上げて顔を見せろ」
サリエルは無言で顔を上げた。
国王は初めて正面から彼を見た。サリエルもまた、目を逸らさず大国の支配者を見据えた。
黒と銀の眼差しがしばらくの間交錯した。
隣にいるシャルナグが焦るほど長く沈黙が続いた後、国王は唇の端を吊り上げて笑った。
「なるほど、皆が騒ぐほどのことはある。人間の男とは思えぬほどだ」
確かに、彼が見たどの国のどの人間よりも彼は美しかった。だが王は他の者のようにその美貌に見とれることはなく、むしろ挑戦的に見下ろした。
「余がオドナス王セファイドである」
「サリエルと申します、陛下。お目にかかれて光栄に存じます」
サリエルは深々と頭を下げた。こちらにも萎縮した様子は少しもない。

セファイドは背凭れに体を沈めて足を組むと、煙管に口をつけた。息とともに紫色の煙が吐き出される。
「だが見てくれと楽師の才とは関係ないな。まず、その楽器を奏でてみよ。そなたと話をするかどうかはそれから決める」
「御意にございます」
サリエルは戸惑うこともなく地面に座りなおして、ヴィオルを膝に抱えた。短い弓を構え、弦の上を滑らせた。
ふくよかで艶のある音色が中庭に響き渡った。シャルナグを除いて、そこにいる誰もが初めて聞く音色だ。
演奏されたのは、その音色によく合った切なく甘い旋律の曲だった。サリエルの象牙のような指が、ある時は目で追えぬほど早く、ある時は一本の弦を長く震わせて、指盤の上を動いた。音を聞かずとも、その動きを見ているだけで幻惑される者もいるのではないか。
これは恋歌なのかもしれない――シャルナグはそう思った。誰かたまらなく愛しい者の名前を、旋律に乗せて何度も何度も呼んでいるように聞こえる。ヴィオルの音域はとても人の声に近い。
シャルナグは数年前に亡くした妻を思い出していた。彼の遠征中に急病で命を落とした最愛の女。勝利を収めて帰宅した時には、もう荼毘に伏された後だった。それから彼はずっと独り身を通している。
甦ってきたのは喪失の悲しみではなく、妻と過ごした日々の幸福感であった。
やはり凄い、この楽師の演奏は尋常ではない――数年ぶりに溢れそうになる涙を、シャルナグは必死に押し殺した。
サリエルがこの都で披露した中で最も長い曲だった。やがて切なげな和音を響かせてそれが終わった時、大臣も役人も兵士も女官も、皆その演奏に魅了されていた。
「…ご無礼を」
サリエルは楽器を置き、再び跪いて頭を下げた。疲労の色は見えない。

セファイドは大きく息を吐いて瞼を開けた。我知らず目を閉じていたらしい。この王の脳裏にはいったいどんな想いが去来したものか――。

「見事だった」

彼は穏やかに告げた。薄い笑みが浮かんでいる。オアシスからの涼しく湿った風を感じた時の表情に似ている。

侍従の一人が差し出した煙草盆に煙管の灰を落としながら、

「初めて聴く音色だが、何とも言えず心地よい。別の世界の歌を聴いているようだった」

「勿体ないお言葉でございます、陛下」

「…よかろう、そなたを宮廷楽師として召し上げる」

背後に控えた役人たちもその言葉に異存はないようだった。ほんの1曲耳にしただけなのに、音楽に縁のない者にさえこの楽師の実力は分かった。

セファイドはシャルナグに目をやった。

「この男を俺の傍に仕えさせるが、よいな？」

「陛下の御心のままに」

「おまえの推挙だ、出自については心配いらんだろう。まったく、おまえのような無骨者にこんな拾い物ができるとはな」

自分でもそう思っていたシャルナグは苦笑して、セファイドも声を上げて笑った。

それから彼は集まった人々に解散を命じた。今日聴けた楽師の演奏は素晴らしく、王の余興のために仕事を中断させられた者たちにとっても十分その甲斐があったらしい。迷惑げな表情で持ち場に戻る者は1人もいなかった。

徐々に中庭が静かになってゆく中、セファイドはサリエルに近くへ来るよう言った。彼を広縁に上げると、椅子の数歩先に控えさせて、肘掛けについた右手に顎を乗せながら、いくつか質問をする。

その楽器の名は？　オドナスへはいつ来た？　ずっと砂漠を旅しているのか？

サリエルは将軍宅で答えたのと同じように返答をした。ただ自分の出身についてだけはやはり同じくぼかして答えたが、王もそこは深く追求しなかった。彼の肌の色も目の色も、砂漠から遠く離れた国の民であると証明している。

セファイドは質問をしながら、サリエルの顔を凝視した。色素の薄い端整な顔立ち――冷淡ではないが、その表情からは感情が読み取りづらい。すべてを拒絶しているようでもあり受容しているようでもある。だが――。

「…以前にどこかで会っただろうか？」

記憶を手繰るように目を細めて、セファイドはそう訊いた。胸の奥に、さざ波が消えない。湖の奥深くに投げ込まれ、水面に波を立てているものの本体が何か分からなかった。

当然のごとく、サリエルは首を振った。

「いいえ」

「まあそうだろうな…俺の勘違いだ」

シャルナグはそんな国王の様子を眺めて、少し意外な気がした。彼の知る限り、セファイドは初対面でその者が自分の敵か味方か、有能か無能か、直感的に見抜くことが多かった。その彼が、ここまで興味深げに他人を眺めている。戸惑っている、とも取れる。獲物の正体を計りかねて上空を旋回する猛禽類のようだ。

奇妙な空気を掻き消すように、セファイドは軽く首を振って煙管の煙をふかした。

「宮廷楽師になったからといっておまえの自由は何ら制限されるものではない。誰の前で弾いてもよいし、街へ出ることももちろん構わない。だが、ひとつだけ」

彼は本気か冗談か分からない笑みを浮かべて、

「王宮内での色事は自重してくれ。十分自覚があると思うが、おまえの取り合いで国が滅んではかなわんからな」

「かしこまりました」

サリエルは特に謙遜することもなく、生真面目な表情で肯いた。

属国の王子・再会

サリエルにあてがわれたのは、風紋殿の一室だった。
部屋の間仕切り布を揺らすのはアルサイ湖から吹いてくる風だ。ここは王都でいちばん水辺に近い場所である。
宮廷の女官たちは手早く部屋を整えると、足りない物は何でもお申し付け下さいませと言って出て行った。とても名残惜しそうに――。
「ここは特に重要な国賓を泊める部屋のひとつだよ」
サリエルに付き添ってきたシャルナグは、遠く東方からは運ばれた紫檀の家具を見ながら言った。
「楽師に与えるには十分すぎる部屋だ。陛下はよほど貴殿がお気に召したらしい。私も安心したよ」
彼の口調に含みはなかった。これが彼以外の人間なら、美しく優れた楽師を差し出して点数を稼ごうとする意図があってもおかしくない。しかし国王とは幼い頃から兄弟のように身近に育ち、成長して後は誰よりも信頼を受ける家臣になったシャルナグにはそういった策略は無縁だった。
将軍宅に滞在している間、サリエルもその辺の事情を察していた。
サリエルは親しみと感謝のこもった表情でシャルナグを見た。
「将軍には本当にお世話になりました。感謝の言葉もございません」
「私は貴殿をあるべき場所へ連れてきただけだ。すべては貴殿自身の才ゆえだよ、サリエル殿」
シャルナグは素直に言った。戦において策を弄したり敵を罠にかけたりはできても、面と向かった相手に嘘や甘言の吐ける男ではなかった。
サリエルは薄く笑った。
「本当に実直なご気性でいらっしゃる。それでは王宮で何かとご苦労なさるでしょう」

「私は腹芸はできんし、他人の悪意にも疎くてな。おかげであまり嫌な思いもせずにすんでいる」
「そういうところが私は好きですよ、シャルナグ様」
シャルナグは強い髯の口元を歪めた。照れ隠しとも取れる表情だ。
「やめてくれ。貴殿にそう言われると何やら妙な気分になってくる」
彼は何度も咳払いをして、ごまかすように窓から中庭を見た。
「では私は帰るが、王宮にはよく来るから、何かあったら相談してくれ」
「はい、ありがとうございます」
シャルナグが部屋を出ようとした時、回廊の向こうから女がやって来るのが見えた。キルケである。
「おめでとう、サリエル。あなたなら絶対に陛下のお気に召すと思ったわ」
彼女は親しげにそう言って、楽師の白い手を握った。
「これから同僚ね。よろしく」
「こちらこそ」
「あなたにぜひ挨拶したいという方をお連れしたのよ」
キルケが脇に避けると、後ろから小さな王女の姿が現れた。
「リリンス様！」
シャルナグが驚いたようにその名前を口にした。
リリンスは頬を紅潮させながらも、礼儀正しく腰を屈めてお辞儀をする。
「ごきげんよう、シャルナグ将軍、それから新しい楽師様」
「いけませんぞ、姫様、お1人で他人の部屋へなど。女官長が何と言うか」
「1人じゃないわ、キルケと一緒よ」
少女は拗ねたような表情を作った。シャルナグはちらりとキルケを見たが、歌姫は将軍の小言などどこ吹く風で、
「サリエル、こちらはリリンス殿下。セファイド陛下の末の王女でいらっしゃいます」

「姫様、お会いできて光栄です」
サリエルは優しく微笑んで、その場に膝をついた。目線の高さが同じになると、少女の顔がぱっと輝いた。
オドナス王にはそれぞれ母親の違う息子と娘が3人ずついる。王子たちは、長兄にして正妃の子アノルトを筆頭にそれぞれ国内各地の統治と守りを任じられ、王女たちは国交のある他国へ嫁いでいた。最後に残ったのがこのリリンスであり、彼女もまた、あと数年で国策のためにいずこかへ嫁がされるのだろう。
だが今のリリンスは、まだまだ無邪気な子供にしか見えなかった。
「さきほど、東屋にいらっしゃるところを拝見しました」
「…バレてたんだ。目がいいのね」
王女は屈託なく笑った。
「さっきの演奏、とても素敵だったわ。私、音楽を聴いて涙が出そうになったの初めて」
「ありがとうございます」
「そのうち私の所にもお呼びしていいかしら？　きっとキーエもシルセラも大喜びするわ。あ、うちの侍女なんだけど」
王女の部屋に王宮中の女官が詰めかけて黄色い悲鳴が上がる様を想像し、シャルナグは渋い顔をした。
「もちろんですよ。いつでも伺いましょう」
サリエルが答えると、リリンスはやったと言って、それから小さく舌を出した。いつも言葉遣いでは女官長に叱られている。
キルケはその様子を好もしげに眺めて、
「ねえ姫様、キルケが申し上げた通りでしょう。きっと姫様のお気に召しますと」
「うん、気に入ったわ」
リリンスは父親によく似た明るい黒瞳でまじまじとサリエルを見た。
「近くで見るとほんとに綺麗ね…今まで王宮にやって来た楽師はみんなおじいちゃんだったから、私、歳を取らないと楽師にはなれな

いのかと思ってたわ。あなたみたいな人は初めて。西国の商人が持って来たお人形に似てる。磁器でできてるの。磁器っていうのは焼き物なんだって」
「私は残念ながら焼き物ではありませんが」
「ほんとだ」
王女の柔らかい手がサリエルの白い頬に触れた。男のものとは思えないほど肌理の細やかな皮膚は、しかし磁器よりも冷たかった。
リリンスはにっこりと笑った。
「そうだ、宮廷楽師をクビになったら、私の愛人にしてあげるわ」
シャルナグが目を剥き、キルケはぷっと吹き出した。
サリエルも口元に苦笑を刻む。
「とても光栄ですが、私は王の楽師ですので勝手はできません」
「もちろんお父様があなたに飽きてからの話よ。だって人の心は変わるものでしょ？」
「よくご存じなんですね」
「この砂漠も昔は海の底だったんだって。そういう風に考えてる学者がいるって本で読んだ。なのに、人の心だけが変わらないなんて信じられないじゃない」
リリンスは自信たっぷりに言って胸を反らせた。
博識なのか単なる耳年増なのか、実に不思議な少女であった。しかしその天真爛漫さが嫌味にならず、他人に嫌われることがなさそうな雰囲気を持っていた。人徳、と言えるかもしれない。
「お父様はとっても飽きっぽいのよ。後宮のねえやたちだってしょっちゅう入れ替わってるもの。だから、お父様に捨てられたら私の所へ来るといいわ」
「姫君が何とはしたないことを。楽師が困っておいでですぞ」
見かねてシャルナグが嗜めた。一国の王女がどこでそんな口のきき方を覚えてきたのか、彼は頭が痛かった。やはり後宮の女たちとは接触させないようにしなければ。
リリンスはちょっと口を尖らせて、それからふうと息を吐いた。

「…ごめんなさい。私いつもお喋りが過ぎるって叱られるの。怒った？」
「まさか」
「じゃあまた来てもいい？　演奏だけじゃなくて。旅のお話も聞きたい」
「姫様のお好きな時にお好きなだけ、お付き合いしますよ」
サリエルの返事に、彼女はまた太陽のように微笑んだ。
いい頃合いと見て、キルケが声をかけた。
「姫様、そろそろお部屋へ戻らないと。女官たちが心配しますよ」
「あっ、そうね！　お昼も食べなきゃいけないし」
リリンスは弾かれたように姿勢を正した。
昼食後には楽しみな農場視察が控えている。王女は砂漠の成り立ちと人の心の機微の他に、自国の農業にも等しく興味があるのだった。
「ではこれで失礼いたします」
リリンスは再び気取った様子でお辞儀をして、勢いよく部屋を飛び出した。衣装の裾を摘んで、一目散に回廊を駆けてゆく。女官長の目に触れて大目玉を食らうのも時間の問題だろう。
まるで、小さな嵐が駆け抜けて行ったようだった。
「まったく…姫様のお転婆にも困ったものだ」
シャルナグは疲れたような声で言ったが、本気で呆れて怒っているわけではなさそうだった。リリンスはとても父親であるセファイドに似ていて、だからどんなに小生意気な口をきいても憎めないのだ。
サリエルはゆっくり立ち上がった。
「聡明でお優しい王女ですね。将来が楽しみでしょう」
「うむ、陛下も目に入れても痛くないほどの可愛がりよう、いずれはオドナスの王女としてよい嫁ぎ先を探さねばな」
「あら、嫁に行くだけが女の幸せじゃないですわよ」
キルケはわざとらしく笑みを含んでシャルナグを見た。
「王族の姫が嫁に行かんでどうすると言うのだ」

「だって、姫様に想うお相手ができたらどうします」
「陛下がお許しになるはずがない。女は想うより想われて嫁ぐのがいちばんなのだ」
「殿方の将軍にそのようなこと、分かるはずないでしょう」
2人の軽い言い争いを、サリエルは物珍しげに眺めている。強面の将軍に対してここまで言い返せる女は、王宮で彼女だけかもしれない。
「女は一度心に決めた相手ができたら、例えそれが報われないと分かっていても想い続けてしまうものなのです。相手の家柄の良し悪しや裕福かどうかなんて関係ありませんわ。リリンス様にもそんなお相手ができたら幸せだと思いますわね」
キルケはきっぱり言い切って、シャルナグが何か言おうとするより先に、サリエルに向き直った。
「ということでサリエル、またね。あなたの演奏で歌うこともありそうだわ」
「楽しみにしています、キルケ」
彼女は楽師ににっこりと微笑んで、うなじに手をやりながら部屋を出て行った。
サリエルはシャルナグを見た。将軍は気まずげに髯を撫でていた。
「シャルナグ様…」
「何だ」
「キルケのこと、お好きなんですね」
シャルナグは咳き込んだ。みるみる顔に血が上る。
「何だ、何で分かった」
「何で分からないと思われるのか、逆に不思議です」
「うむ…2回結婚を申し込んで2回とも断られた」
妻を亡くして以来独身を通してきた将軍の心を捉えたのは、彼女のさっぱりした気性と度胸のよさだった。舞台の上でどれだけ妖艶に着飾ろうと、彼女はいつも凛々しくてそれでいて明るい。生真面目なシャルナグの言動は少なからず彼女にからかわれたが、それす

らも楽しく思えた。
「いい歳をしてみっともないと思うか？」
「いいえ」
サリエルが答えると、シャルナグは複雑な表情をして視線を宙に漂わせた。
私はあなた様の妻になれるような身分の女ではございません――キルケはそう言って彼の申し出を断ったのだ。歌が歌える限り、どうかこのままオドナス王にお仕えすることをお許し下さい――。
シャルナグは軽く首を振った。
「つまらない話をしたな。もう行かねば」
「お忙しいところをありがとうございました。お見送りさせて下さい」
「うむ」
肯いたシャルナグは、もう将軍の威厳を取り戻していた。

彼らは連れ立って部屋を出て、回廊を歩いた。
微風が楽師の黒い髪を撫でてゆく。太陽が天頂にかかる時刻だが、オアシスが近いせいかそれほど暑くはない。ここから見える中庭は緑の木々が生い茂り、さきほど演奏した謁見室前の広場とはだいぶん趣が異なっていた。回廊で繋がれた他の建物は姿を隠され、森の中の小道を進んでいるような錯覚を覚える。
サリエルがふいに立ち止まった。シャルナグが不思議そうに問いかけようとして、同じ気配に気づき、回廊の先を見る。
薄緑色の大きな羊歯の葉を掻き分けるようにして、数人の人物が中庭から回廊になだれ込んで来た。人数は5名――1人が回廊の黒い石の床で尻餅をつき、別の1人がそれに覆い被さるような姿勢になっていた。残りの3人は2人を取り囲んでいる。
見たところ、全員が10代半ばの少年のようだった。
「何だとフツ！　もう1回言ってみろ！」
声を荒らげているのは、尻餅をついた1人に馬乗りになった人物。

相手の胸ぐらを掴み上げて拳を振り上げている。身に纏った緋色の衣装が目に鮮やかだった。
「なんぼでも言うたるわ。おんどれなんかただの田舎もんや。どんな手ぇ使うて国王に取り入ったんや！？　この恥知らず！」
尻餅をついたままの少年は緋色の少年よりも大柄に見えた。相手の勢いにひるまず憎々しげに悪態をつく。
「この…！」
緋色の少年が拳を振り下ろそうとすると、周囲の少年たちが慌てて止めに入った。
「やめろって、ほら！　こんなところで」
「見付かったら謹慎じゃ済まないぞ」
仲間たちの手で緋色の少年が無理矢理引き離さると、尻餅をついていた少年も衣服を直しながら立ち上がった。
「…どんだけ血の気が多いねんロタセイの民は。『緋色の勇兵』が聞いて呆れるわ」
わざと聞こえるように口にした呟きに、緋色の少年が敏感に反応した。仲間の腕を振り払って、再び相手に掴みかかってゆく。
「何をしておるか！」
シャルナグがまさに獅子の咆哮のような大声で怒鳴りつけた。少年たちがハッと動きを止めてこちらを見る。
まずい、という表情をした彼らにシャルナグはわざと猶予を与えたのかもしれない。ゆっくりと将軍が近づいて行く間に、少年たちはいそいそと中庭の茂みへ姿を消した。
回廊には俯いた緋色の少年だけが残った。
「またおまえか、ナタレ」
シャルナグは少年に近寄ると、表情を少し緩めて声をかけた。
「つまらない挑発には乗るなと言っただろう。彼らはおまえを妬んでいるだけだ」
「申し訳ございません、将軍。お騒がせを致しました」
少年は固い声で言った。先ほどまでの炎のような激情が跡形もな

く消えて、仮面に似た無表情が顔を覆っている。
　そんな変化をシャルナグは同情と優しさの入り混じった目で見て、それからサリエルを呼び寄せた。
「お見苦しいところをお見せしたな。こちらはナタレ殿。砂漠の東方に住まうロタセイ族の王太子だ」
「存じ上げております」
　サリエルは答えて静かに歩み寄った。
「またお会いしましたね、王子。覚えておいでですか？」
　ナタレと呼ばれた少年は、サリエルを見て顔を強張らせた。
「あなたは…あの時の…？」
「はい、サリエルと申します。本日より楽師としてオドナス王にお仕えすることになりました」
「何だ、お知り合いだったのか？」
　シャルナグは2人を交互に見た。
「以前、旅の途中に砂漠で盗賊団に襲われたところを、ナタレ殿とロタセイの兵士に助けて頂きました。3年前になりましょうか」
　懐かしげな眼差しをサリエルはナタレに向けた。
　金色の砂と蒼天の狭間を、駱駝で駆けてゆく緋色の兵士たち。その先頭を走っていた幼い王子はもう声変わりを迎えて、背丈もずいぶん伸びたようだった。体つきはまだ華奢だが、精悍な面立ちにはもうあどけなさはなく、王子に相応しい凛とした気品を備え始めている。
　ナタレもまたサリエルを眺めた。再会が信じられなかった。だが確かにあの時の旅人だ。この美貌、銀色の両眼、見間違うはずがない。3年も前の一瞬の邂逅であったが、強烈に刻み込まれた記憶の中の彼と、一寸の違いもない。
　サリエルが抱えた無花果のような楽器を見て、ナタレはあの時の旅人が丸い包みを背負っていたことを思い出した。あれは楽器だったのか。
「あの時は本当にありがとうございました。ですが、なぜロタセイ

の王子がここに？」
「ナタレ殿は留学生としてオドナスへ招かれたのだ」
シャルナグが答えた。
留学生、という言葉がナタレの感情に波を立てたようだった。彼の黒い目の中に暗い炎が一瞬湧き上がったが、すぐに消えた。
オドナス王は、領土拡大に伴って属国となった国の王族の子女を、留学生として王都に召喚しているという。属国の自治を認める代わりの人質でもあり、また次世代を担う若者に対して融和教育を施す意味もあった。
つまり、誇り高きロタセイの民もオドナスの軍門に下ったということなのだろう。
「今日は王宮内の建築物見学の日でな、午後から学生が集まって来ておるのだ」
「先ほどの方々もいずれかの国の王族なのですね」
「とはいえ皆若いからな、まあ喧嘩のひとつやふたつするものだろう」
シャルナグは笑い飛ばしたが、ナタレは無表情で目を逸らせた。
サリエルが話しかけようとする前に、彼は頭を垂れた。
「では私も失礼致します、将軍――楽師殿」
「あ、ああ、遅れぬようにな」
「またお会いしましょう、ナタレ殿」
ナタレは礼儀正しく一礼すると、回廊を出て中庭へ降りた。
鮮やかなロタセイの緋色が木々の緑に飲み込まれてゆくのを見送って、サリエルは小さく息をついた。
「シャルナグ様、彼は…」
「とても優秀だよ。王都に来てまだ1年足らずだが、学問においても武術においても、学生の中では常に5本の指に入ると聞く。さすがは武勇で知られるロタセイの王子だ。少々気位が高いのが問題だが」
「今のように学友と諍いを？」

「半年ほど前から国王の侍従見習いを務めていてな、理不尽な嫉妬を受けることも多いようだ。真面目な子だけに、受け流すことができんのだろう」
シャルナグはナタレの消えていった方向を眺めて、木漏れ日に目を細めた。
「ずいぶんナタレ殿を気にかけておいでですね」
「ロタセイを征服し、あの子を王都に連れ帰ったのは私だからな」
彼は薄く笑って、腰に吊るした長剣の柄を撫でた。

正妃と第1王子

その夜の晩餐の席に、さっそくサリエルが呼び出された。

風紋殿の広間に設えられた卓台には、香辛料のきいた焼肉や、塩漬けの魚、数多くの種類の野菜と色とりどりの果物が並べられていた。これだけの東西の食材を集められることからもこの国の繁栄が見て取れる。実際、旅の楽師が見てきたどの国よりもオドナスの食卓は豊かだった。

卓台を囲んでいちばん奥に座すのがセファイド王、その両側に王女リリンスと正妃タルーシアがいた。それから国王の子の生母である4人の側室も同席している。

彼らは食事の手を止めて、楽師の演奏に聴き入った。

サリエルが奏でているのは穏やかな波のような曲だった。数本の弦を同時に響かせ、不思議な和音が波紋のように広がってゆく。夜のオアシスを思わせる、静かで美しい曲。

給仕係の女官たちも仕事を忘れてうっとりと目を閉じている。その中には王の侍従見習いであるナタレの姿もあった。

「美しい音色だ、楽師殿。素晴らしい」

最後の和音が消えると、セファイドはゆっくりと拍手をしながら賛辞を送った。彼は昼間よりももっと簡素な部屋着姿で、長い足を投げ出すようにして長椅子に凭れている。

サリエルはヴィオルを置いて姿勢を正し、一礼した。

「畏れ入ります」

「奏でるあなたもお美しいこと。今日は後宮の女たちが大変な騒ぎようでしたわ」

口元に扇を当てて妖艶に微笑むのは正妃タルーシアであった。国王と同じくらいの年齢なのだろうが、手入れされた肌には染みひとつない。それでいて身を飾る豪華な装飾品に負けない風格を感じさせる美女だった。

「あなたのような方が長く旅の生活を送っていたとは信じられませぬ。それだけの腕と美貌があれば、どこの国でも厚遇されたでしょうに」
タルーシアはそう言って女官の1人に向けて扇を振った。女官は素早く盆に載せた杯をサリエルのもとへ運ぶ。
杯に注がれた果実酒を、サリエルは目礼してから飲み干した。
「私にとっては旅が家のようなものです。物心ついてよりずっとそのような生活を送って参りましたので、ひとところで暮らすことなど考えられませんでした」
「では、オドナスに留まるのはなぜだ？」
セファイドは皿の上の料理を摘みながら訊いた。南洋で採れる牡蠣を干したものだ。
サリエルはセファイドの方へ顔を向けて、
「このオドナスが、今現在、地上で最も繁栄している国だと感じたからです。そして、畏れながら陛下、その国を造り統治する王がどのようなお方か、ぜひ自分の目で確かめたいと思い、ここへ参りました」
「見かけによらず好奇心の強い男だな。で、実際に俺に会ってどう思った？」
タルーシアと側室たちが少し強張った表情で彼らを見た。一介の楽師が国王を評するのを許すのか。
サリエルは、しかし動揺した様子もなく、
「明朗で理知的なお方です。快楽を否定なさらず、それでいて何事にも軸のぶれない強い理性を持っておいでのようです。それは何かを深く悟っていらっしゃるからこそではないかとも思われますが」
「それって誉めてらっしゃるのよね」
リリンスが横から茶々を入れた。
「この国が嫌になって、早々にオドナスを立ち去ったりしないわよね？」
「リリンス、おまえはまたそういう口を」

タルーシアがたしなめたが、セファイドは笑っている。
「王女もおまえが気に入ったようだ。一生この国で過ごせとは言わんが、できるだけ留まってくれると嬉しい」
「勿体ないお言葉です」
「ナタレ」
セファイドは広間の入口付近で待機するロタセイ王太子を呼び寄せた。
昼間と同じ緋色の衣装のナタレがやって来て脇に控えると、
「シャルナグから聞いた。これと縁があるそうだな」
と、サリエルに尋ねる。
先ほど演奏に聴き入っていた時は穏やかな笑みさえ浮かべていたナタレであったが、セファイドに呼ばれた途端、よくできた仮面のような硬い表情が少年の顔を覆った。
「はい、将軍からお聞き及びの通りです」
「ナタレはなかなか見所があってな、今は俺の侍従見習いに取り立てている。ロタセイはオドナスの東の守りの要だ。将来は役に立ってもらわねばならん」
侍従は国王の秘書や執務補助を主な仕事とし、貴族の子弟が務めるのが普通だ。王の身近で政治や軍事を学び、認められれば将来は国の要職に就くことが約束される。セファイドは、その対象を属国の王族にも広げようとしているらしい。
ナタレは変わらぬ無表情で立ち尽くしている。彼が押し殺しているのは自分に対する誇りだろうか、蔑みだろうか――。
そんなナタレを少し悲しげに見詰めるリリンスに、サリエルは気づいていた。
「父上！」
突然、広間に快活な声が響き渡った。
広間の入口の薄布を勢いよく跳ね上げて、1人の少年が入って来たところだった。
「おお、アノルト！」

タルーシアが椅子から立ち上がる。
大股ですたすたと歩いて来るその少年は、今まさに砂漠から戻ってきたような旅装束に身を包んでいた。実際に、上着の裾から金色の細かい砂が零れ落ちている。
「ただ今戻りました、父上」
彼はセファイドの傍らに行くと、そう言って丁寧に一礼した。
オドナス王の長男、アノルト王子である。父親によく似た端整な顔立ちと晴れやかな黒い瞳。長い手足を備えた体躯は、１７歳という歳に似合わず十分に逞しい。
タルーシアだけでなく側室たちも席を立って、彼へ深々と頭を下げた。
埃っぽい姿のまま広間に現れた息子の日焼けした顔を、セファイドは満足げに眺めた。
「アノルト、よく戻った」
「お食事中、このようなりで入室したことをお許し下さい。つい先ほど王都に着きました。一刻も早くお会いしたくて」
「何も気にする必要はありませんよ。おまえはこのオドナスの王子なのだから」
タルーシアは約７ヶ月ぶりに会う息子を満面の笑みで迎え、愛おしげにその肩を撫でた。
「よく顔を見せておくれ…まあこんなに日焼けをして。怪我などしませんでしたか？　食事はちゃんと取れていましたか？」
「母上…俺はもう子供ではありませんよ。この通り元気です」
アノルトは苦笑しながらも、母親の気遣いには感謝しているようだった。タルーシアにとってはただ１人の子であり、次の国王の座にいちばん近い王子であるから、その溺愛ぶりは当の王子が少々辟易するほどであった。
アノルトは食卓を挟んだ向こうで立ち尽くしているリリンスに目をやった。
リリンスは胸の前で手を組んで珍しくもじもじしている。父と母

と子、その中に入っていくのをためらうように――。
「どうしたリリンス、兄の顔を忘れたか？」
セファイドが優しく声をかけた。
リリンスは緊張した面持ちで言葉を紡いだ。
「あ…アノルト殿下には無事のご帰還、心よりお祝い申し上げます。えっと…」
「リリンス」
アノルトはにっこりと笑って妹の名を呼んだ。
「会いたかったよ。おいで」
その笑顔に釣られるように、リリンスの緊張がいっきに解けた。彼女は彼女らしい満面の笑みになってアノルトに駆け寄った。真新しい茜色の衣装の裾がひらひらとたなびく。
「兄様、お帰りなさい！」
胸に飛び込んできた妹を、アノルトは抱き締めた。母親の違う2人ではあったが、その姿は仲のよい兄妹そのものだった。
「ただいま。大きくなったね、リリンス」
「もう駱駝にもひとりで乗れるようになったのよ」
「それは凄い」
「いつまでたってもお転婆で困ったものです」
タルーシアが手にした扇をぱちんと閉じて眉を顰めた。
「もう縁談がきてもおかしくない年頃だというのにまるきり子供で。今日だって回廊を走り回っていたと聞きましたよ」
「母上は相変わらずリリンスにお厳しいな。縁談などまだ早いではありませんか」
義母に叱られて萎れるリリンスをアノルトが庇ったが、タルーシアは首を振った。
「私はリリンスのためを思って言っているのです。いずれはオドナスの王女として他国へ嫁がねばならぬ身――国を背負って一生を送る王族の女としての覚悟を、リリンスも早く持たなくてはなりません。それなのに陛下ときたら甘やかすばかりで…」

タルーシアは濃く縁取りされた切れ長の目でじろりとセファイドを睨んだが、夫は気にする風もなく受け流した。
「もう小言はそのくらいにしておけ、タルーシア。息子が無事に務めを果たして戻ったのだ。アノルト、戦果は先に帰還した部隊から報告を受けている」
「はい、父上のご命令通り、南方の2部族を平定して参りました。これで諸島部進出の足がかりができました」
アノルトは誇らしげに答える。
大陸の南の果てまでその領土を広げたオドナスであったが、未だ大国に抵抗を続ける部族がいくつか残っている。そのうち南方の沿岸部に住む2部族を、アノルトは約半年をかけて打ち破り、その結果南洋交易の要所ドローブ港がオドナスのものとなった。諸島部諸国と交易を続けるにしろ侵攻するにせよ、重要な拠点を得たことになる。
セファイドの少し後ろでやり取りを聞いていたナタレの手が、自らの緋色の衣の裾をきつく握り締めていた。指の関節が白く浮き出るほどに。
「詳しくは後で聞こう。今後についても」
セファイドは、息子の高揚を押し止めるように穏やかに言った。
「正式な凱旋祝いはいずれやるとして、今夜は十分に飲んでゆっくり休め」
「はい、ありがとうございます」
アノルトはリリンスの頭をくしゃくしゃと撫でた。
「ねえ、兄様もサリエルの演奏を聴いて。とても素敵なのよ」
リリンスは撫でられて乱れた前髪を気にもせず、さっそくお気に入りの楽師を兄に紹介した。
長い食卓の向こう、敷物の上に腰を下ろした楽師は慎ましく頭を垂れていた。
「新しい楽師のサリエルだ。珍しい楽器を演奏する。今日やって来たばかりだが、もう王宮の有名人だぞ」

からかい混じりのセファイドの言葉に、サリエルは困ったように微笑んで顔を上げた。
アノルトはその美しさに驚き、それから、さっきすぐ横を歩いてきたにもかかわらず彼の存在に気づかなかったことを意外に思った。これほどの存在感がある男なのに、自分が広間に入ってきた時には何の気配も感じなかった。
「サリエルと申します。アノルト殿下」
「あ…ああ、確かにあなたなら1日で有名人になりそうだな」
「もう1曲所望する。王子のために弾いてやってくれ」
セファイドが命じると、サリエルは肯いてヴィオルを手に取った。
女官たちが帰還したばかりのアノルトから旅装束の上着を預かり、てきぱきと動いてタルーシアの隣に席を作る。
王子が長椅子に腰掛けて、杯を手に取った頃、震える弦の音色が再び広間に流れ始めた。

ナタレは何ともいえない居心地の悪さを感じながら隣室の様子を窺っていた。
今夜は新月で、壁に取り付けられた数基の燭台に照らされた室内は薄暗い。その灯りさえも、窓から入ってくる風に揺らされて時折心許なくなる。風はアルサイ湖を渡って湿り気を帯びていた。
晩餐の後、セファイドはサリエルを伴って自室に戻った。シャルナグ将軍などごく一部の側近を除き、彼が自室に他人を招き入れるのは珍しいことである。それも、今日やってきたばかりの楽師を。
朝までその続き部屋で待機しているのが侍従見習いの役目だった。これは当番制で、10日に1度ほど回ってくる。ただしセファイドが後宮に渡る晩だけは、年少のナタレはその任を免除されていた。さすがに教育上よろしくないと、侍従長の配慮だろう。
夜中に呼び立てられる用はほとんどなかったが、寝ているのかと思いきや、王はいつも明け方まで読書をしたり書き物をしたりして起きていることが多いようだった。

国王はいつ眠るのだろう、と思う。生まれつき睡眠時間が極端に短い体質の人間がいるというが、あの男もそれなのだろうか。

ナタレは大きく開いた窓枠に腰掛けた。涼しい風が頬を撫でてゆく。

月が出ていないのでいつもより時間の経過が分かりにくいが、もう夜半近い。少しの間ヴィオルの音色が心地よく流れていたものの、それも止んでずいぶん経つ。

2人で何を話しているのか――ナタレは自分でも不思議なほどそわそわしていた。

今日回廊でサリエルに再会して、本当はとても嬉しかった。同じ旅人に再び出会えるなど、砂漠では奇跡に等しい。たったひとりきりで灼熱の世界を渡ってきた彼がどんな人間なのか、もっと話が聞きたかった。

でも、だからこそ、ナタレはサリエルに親しく声をかけることができなかった。彼は過酷な旅を経てなお変わらずに美しい。それに比べて自分は――あの時自由に砂丘を駆け回っていた自分はもういなくなってしまったのだ。

今の自分は籠の鳥だ――大切な一族を征服した仇の懐で、安穏と養われている。

それでもナタレが境遇を受け入れ自己を保ってこられたのは、自分を王太子に選んでくれたロタセイ王たる父に報いるためだった。

圧倒的な軍事力の差でロタセイを追い込んだオドナス軍は、あえて彼らに止めを刺そうとはしなかった。わざと戦いを長引かせ、疲弊したところを見計らって、ロタセイにとって相当に有利な条件で和睦を持ちかけたのだ。

ロタセイはオドナスの属国となるものの、オドナスからの知事は置かず、完全な自治を保証する。オドナスの領土内であれば活動範囲に制限は設けない。ロタセイ王家もこれまで通り存続を認める。

ただし王太子、つまり次期ロタセイ王を王都へ送ること――これ

が唯一課せられた逆の条件であった。
　ロタセイ王ザルトは悩んだが、結局はオドナスの条件を飲んだ。突っぱねればオドナス軍は本気で彼らを壊滅しにかかり、そうなればロタセイの民は一人残らず砂漠で干からびるだろう。それにオドナス側から和睦の申し入れがあったこと、完全自治を認められることで、何とか部族の面子が保たれたからだ。
　ロタセイ王の後継者はその時点では決まっていなかったが、ザルトはナタレを王太子として指名した。
ロタセイのために王都へ行ってくれるか、と父は問い、喜んで参ります、と息子は答えた。
　ナタレは正室の子ではあったが、王の長男ではなかった。王には側室との間に先に生まれた男子がいたのである。しかもナタレの母親である正室は産後すぐに亡くなっており、子はナタレだけで、弟妹もみな側室の子であった。
　父王は子供には平等に接したが、母親のいない彼はやはり常に孤独を感じていた。腹違いの兄弟たちにも気を遣う。正室の子でありながら後ろ盾のない彼は、王太子となれるかどうか難しい立場だった。
　その自分を父上は王太子と認めて下さった――嬉しさと誇らしさが、遥か異郷の都へ向かう心細さを凌駕していた。
　いつも無口で厳しく、笑顔など見たことのない武人そのものの父――ナタレはそんな父を慕っていたし、尊敬していた。父上のために、俺は立派に務めを果たしてくる。ロタセイの王太子として決して誇りは失わない。
　そんな健気で強い決意を胸に、オドナス軍に同行してナタレは単身王都へ向かった。今から1年前、彼が１４歳になったばかりの頃である。

　ふいに人の気配がして、ナタレは我に帰った。
　王の部屋に繋がる出入口の布を押し上げて、白い人影が立ってい

た――サリエルである。
「少し手を貸して頂けないだろうか？」
驚くナタレにそう言って、サリエルは隣室に戻ってゆく。ナタレは慌てて後を追った。

異邦の楽師

国王の自室に入ると、香炉から立ち上る柔らかい香りと混じって、強烈なアルコールの匂いが鼻を突いた。
「うわ、酒臭っ…」
「こっちだ、ナタレ殿」
サリエルが部屋の奥で呼ぶ。普段読書などに使っている机の脇にごく背の低い長椅子があって、その上でセファイドがぐったりと倒れているのが見えた。
「陛下！」
ナタレは駆け寄ろうとしたが、その周囲の状況を見て納得した。陶器の酒瓶が、ざっと数えただけで4本転がっている。しかもこの独特な匂いは砂漠でいちばん強いといわれる蒸留酒のものだ。
セファイドは長椅子にその体躯を投げ出して、小さな鼾をかきながら眠っている。精緻な刺青の覗く右腕がだらりと垂れ、その下の床に杯が転がっていた。
「たった2人でこんなに空けたのか？　あの短時間で？」
ナタレは呆れてサリエルを見た。彼は困ったような表情で肯く。しかしその頬にはわずかな朱色も上っておらず、透き通るほどの白さを保っている。
「陛下はかなりお強いようだったが、さすがに飲みすぎたかな」
「これだけ飲めば象だって酔っ払うよ」
そう言いながら、ナタレは知らず知らず笑みを浮かべていた。
「凄いね、俺、この人が酔い潰れるところなんて初めて見た。いつもどれだけ飲んでも平気な顔をしてるのに。サリエルは強いんだな」
「そうかな」
泥酔状態の王を前に、ナタレはホッとした。セファイドの漁色家ぶりは周知の通りで、現在も後宮に多数の愛妾を抱えている。今のところその対象は女性だけだが、サリエルほどの美貌の主が相手な

らあるいは――という彼の心配は杞憂に終わったようだ。
ナタレはとりあえず足元の酒瓶をまとめて端に寄せた。
「寝台に運ぼう。そっち、持って」
「分かった」
2人はセファイドの頭と足を抱えて、奥にある寝台へ運んだ。王が目を覚ます気配はまったくない。
薄い布団を被せて、湖からの夜風を避けるために寝台の天蓋を下ろしながら、ナタレの動きがふと止まった。
両眼が、意識のないセファイドの顔を捉えている。
初めて見る国王の無防備な寝顔――規則正しく上下する胸元と喉仏を庇うものは何もない。ナタレの背筋を寒気に似たものが駆け上がった。
今なら…今ならば――。
背後で、緩い弦の音が鳴った。
鞭で打たれたようにナタレが振り返ると、サリエルがヴィオルを手にしてその弦を指先で弾いていた。
弓で鳴らすのとはまた趣の異なるふくよかな音色に、ナタレの悪寒がすうっと引いていった。そして初めて、自分の手がセファイドの喉下に伸びていたのに気づく。
「…陛下はお休みだ。出ようか、ナタレ殿」
サリエルの穏やかな口調に促されるまま、ナタレは呆然と肯いた。
続き部屋に戻ったナタレは壁際にぺたりと座り込んで、じっと自らの手を見詰めた。
サリエルがいなかったら、自分はどうするつもりだったのか…全身を駆け上がってきたあの寒気は快感にも似ていた。あれが――殺意か。
「水をもらえないか、ナタレ殿」
サリエルの声で、ナタレは顔を上げた。ナタレの衝動に気づいていたのかどうなのか、楽師は相変わらず静謐な佇まいだった。

「…殿はやめてくれ。ナタレでいいよ」
彼は立ち上がって、燭台の下のテーブルに置かれた水差しから杯に水を注いだ。
「私も少し飲みすぎたようだよ」
喉を鳴らして水を飲み干すサリエルを、ナタレは不思議な心地で眺めた。冷えきった掌に徐々に体温が戻ってくるようだ。
「また会えて嬉しいよ、サリエル。あなたが無事で旅を続けていてよかった」
ナタレは素直にそう言った。昼間、回廊で口にできなかった言葉だ。自然と笑顔が浮かんだ。
サリエルは空になった杯をテーブルに戻して微笑んだ。
「ようやく笑ったね。昼間はまるでよくできた人形のような顔をしていた」
「え…」
「この国がお嫌いか？」
ナタレの顔から笑みが消えた。だが感情を押し殺した無表情にはならず、怒りを含んだ険しい皺が眉間に刻まれた。
「オドナスはロタセイの仇だ。滅ぼされなかったとはいえ戦争では同胞が大勢殺されている。今の俺はその仇の檻に飼われているようなものだ。媚を売るつもりはない」
凍れる刃のように鋭い口調だった。この国に来て初めて吐露する、属国の王太子としての胸の内だった。
サリエルは低く息を吐いた。
「オドナス王は君を評価している。頑なになるのは勿体ないと思わないか？」
「あの男は…俺を手懐けてロタセイを完全に支配しようとしてるんだ。人質の王子を傍に置く理由などそれ以外にないだろう」
ナタレの日焼けした頬は軽く紅潮していた。これほど感情が高ぶるのは久々のことだった。さっきまで冷たかった掌がしっとりと汗で湿ってくる。

ロタセイ王太子のひたむきなほど頑なな言葉を、サリエルはまるで鏡のように静かに受け止めた。
少し間を置いて、言う。
「君のその誇り高さは尊敬に値するが――だが今の君は自分と、自分の故郷しか見えていないようだ」
「…ロタセイの民として祖国を想ってはいけないというのか」
「そうではない。ロタセイは確かに強く誇り高い民だが、同時に固い岩のように内側に閉じている。若い君もその岩の檻に縛られているようだ。君の精神は本来もっと柔軟で生気に満ちているはず――」
ナタレは我知らず胸に手をやった。心臓が脈打っている。
ここに来た日に、すべての感情は殺したと思っていた。敵地でひとり、傷つかぬようにひたすら心を閉ざして、祖国へ戻れる日を待つつもりだった。
それなのに、この気持ちの昂りは何だ。この怒りと苛立ちと悔しさと――まだこんなものが自分の中に息づいていたのか。
サリエルの白い顔が、蝋燭の揺れる赤い炎を映している。銀色の両眼だけが何の色にも染まっていない。
「今この都の繁栄は、地上で1、2を争うほどだ。各地を渡り歩いてきた私にはよく分かる。そんな都を築いた王のすぐ傍で世界を眺める経験は、いずれロタセイを継ぐ君にとってこの上なく貴重だ」
「俺はただの人質じゃないか！　世界など眺められるわけがない」
「違う、それはそういった目を持たないからだ。自分の内ではなく外側を見てみなさい。世界はすぐそこにある」
ナタレは言葉に詰まった。
楽師のこの澄んだ銀色の瞳――この目は、いったいどれだけの世界を映してきたのか。
「ナタレ、ロタセイを繁栄させ、いつかオドナスに匹敵するほどの国にしたいと願うなら、まず王太子の君が外の風を感じ日差しを浴び水を飲むことだ。それには今の立ち位置が最も恵まれている」
そんなことを言われたのは初めてだった。

サリエルの言葉は、ナタレにはよく分からなかった。ただ彼が無責任な慰めやごまかしでそれを口にしているわけではないことだけは感じられた。
鼓動の高鳴りはそのまま、激しい感情がすっと引いていった。
ナタレは沈黙して顔を背けた。考えはまとまらないが、不思議と気持ちが楽になった。ここに来て初めて人と会話をしたような気がする。
「…すまない、不躾なことを」
横顔に向かって、サリエルが詫びた。
「私も無事な君に再会できて嬉しいよ、ナタレ」
「ありがとう…心配をかけてごめん」
ナタレはサリエルに向き直って、再び微笑んだ。疲労と安堵の入り混じった笑みだった。
「正直あなたの言うことはまだ理解できないけど…よく考えてみる。また話そう。サリエルと話していると、なぜだか楽に息ができるみたいだ」
彼にとってこの都で初めて心を許せる相手が、この美しい楽師だった。今までの少年の孤独と不安を思ってか、サリエルの眼差しが少し翳った。
「ナタレさえ心を開けば、友人はたくさんできるはずだ」
「そうかな…よく分からない」
ナタレは困った顔をして顎を掻いた。歳相応の子供っぽい仕草だった。
つられるように、サリエルは笑った。
こうして新しい宮廷楽師にとって王宮での長い初日が終わった。
国王が楽師を自室に招き、2人で飲んでいるうちに泥酔して眠ってしまったという話は、翌日には王宮中に広まっていた。
しかも話には尾ひれがついて、楽師のあまりの美貌に目が眩んだ国王が彼をモノにしようと酒を飲ませたが逆に酔い潰されてしまっ

た――と、セファイドにとってかなり不名誉な噂となってまことしやかに囁かれるようになった。
だがセファイドはこの噂を耳にしても怒ることなく否定もせず、一方のサリエルも曖昧にはぐらかすだけだった。
もともとセファイドが色事に関して鷹揚であることは知れ渡っており、それも彼の人間的魅力の一部と捉えられていたので、噂が事実であろうがなかろうが彼の評価には関係しない。その噂は別のところに影響した。
国王の特別な相手である楽師に妙な真似はできない――そんな緊張感が王宮に集う男女の間に流れ、サリエルに言い寄る者は出てこなかった。初日にセファイドが注意した通り、この先サリエルの奪い合いで争いが起きる事態は回避できそうだ。
案外それが狙いでわざと流した噂なのかも――真面目なナタレは釈然としないながらも納得した。

異邦の楽師（後書き）

こんな感じでゆるゆる続きますが、読んで下さると嬉しいです。
次章ではもう少し1人1人詳しく書きます。

新しい仕事

国王に呼ばれたサリエルが執務室に向かっていると、入れ替わりに出てゆくアノルトと廊下で顔を合わせた。
立ち止まって頭を下げるサリエルに、数人の側近を連れたアノルトは気さくに挨拶をした。
「やあ、楽師殿、父上の所へか？」
「はい、書簡の翻訳を承りました」
「なるほどなあ、あなたのような方がいて父上も重宝しているだろう」
王子は父親によく似た快活な笑みを浮かべた。
サリエルがオドナス王宮に仕え始めて約1ヶ月が経過しようとしていた。
彼は楽師として乞われれば誰の前でも演奏をした。王宮の中だけでなく、貴族の邸宅に招かれることも多い。また気が向けばふらりと街へ出て、以前と同じく広場で演奏することもあった。
その見事なヴィオルの技術と、旅で培った広く深い見識、そして何よりも輝くばかりの美貌で、彼は広く王都の住人に愛されるようになっていた。
サリエルの主人であるセファイドは、もちろん誰よりも彼の演奏を愛でた。日中は執務で多忙な身であるが、夜は3日と空けず自室にサリエルを呼び、就寝前の一時をヴィオルの音色とともに過ごした。
おかげで後宮への来訪が減って、愛妾たちは少々暇を持て余しているようだ。しかし嫉妬されるどころか、後宮でも演奏するよう彼女らから要望が殺到しているのがサリエルの凄いところだった。
それが、最近になって執務室にまで召喚されるようになったのには理由があった。
「父上は今ご機嫌が悪いよ。俺のせいでな」

アノルトは冗談交じりの軽い口調でそう言う。
「南洋諸島部侵攻の件で、言い争いをしてしまった」
国家機密に関わる重大事をさらりと口にする王子を、さすがに側近たちが制しようとしたが、アノルトは気にしなかった。
「議論できるご子息がおいでなのは頼もしいことです」
「父上もそう思ってくれているといいが。おまえは性急すぎると怒られてしまったよ。父上は国土を拡げることにあまり積極的ではないみたいだ」
最後の方は呟きに近く、声が小さくなっていったが、アノルトは我に返って軽く首を振った。
「まあサリエルの顔を見れば父上のご機嫌も直るだろう。よろしくな」
「かしこまりました」
「ああそれから、用が済んだらリリンスの所へも顔を出してやってくれ。あなたがあまり遊びに来てくれないと文句を言ってた」
アノルトは妹思いの兄の顔になって苦笑した。
「俺はこの先、王都と南方を往復する生活になる。我儘な妹だが話し相手になってやってくれ。あの子の出自は聞き及んでいるだろう？　寂しい思いはさせたくないんだ」
サリエルは肯いて、それから気遣うように微笑む。
「それはもちろん――ですが、姫様はご自身の居場所をもうしっかりと作っておいでのようですよ」
「だと安心なんだがな…お」
アノルトは肯いて、それから視線をサリエルの向こうへやった。
つられてサリエルが背後を振り返る。
回廊の先を、数人の男女が通り過ぎてゆくところだった。皆似たような白い服を身に着けて、ゆったりと歩いている。
「アルハ神殿の神官たちだ。今夜は満月だから、午前中に王宮内で礼拝があって…ほら」
アノルトは声を潜めた。

「先頭にいるのがユージュ大神官だよ。昨年先代が亡くなって、あの若さで神官長に就任した。まだ２０歳そこそこだと思う」
言う通り、彼らを率いて先頭を歩くのはまだ若い女だった。華奢な体つきのせいで少女のようにも見える。
彼女はふと足を止めて――こちらを見た。
黄味を帯びた肌と、細い線で描いたような顔立ち。髪と目の色は黒いが、オドナスの民とは明らかに異なる人種らしい。他の神官たちも、男女の差はあれ皆同じような容姿をしている。
ユージュは無表情のまま、アノルトとサリエルに目礼した。顎の位置で切り揃えられた髪が、揺れて頬にかかる。どことなく無機質な印象の女だった。
宗教上の立場では国王の上に立つ大神官である。アノルトとサリエルが丁寧に礼を返すと、彼女は再び歩き出した。
「…異国の方のようですね。アルハ神官は皆そうなのですか？」
サリエルは白い神官服の後ろ姿を眺めながら訊いた。
「そうではないが…アルサイ湖の中央神殿だけが特殊なんだよ。俺も詳しくは知らないが、父上が王位に就いてすぐ、流浪の民だった彼らを受け入れて王都の神官に任命したらしい。ユージュ殿など、その頃まだ子供だったはずだよ」
「神殿の中でお育ちになったわけですね」
「あの方には父上も一目置いている。天候に関する神託を恐ろしく正確に読むし、医者も見捨てた重病人を癒すことすらできるらしい。噂では、魔法が使えるとか何とか」
最後の一言は冗談交じりだった。魔法や呪いがまだまだ信じられている国で、アノルトも父親と同じく現実的だ。
「それに美人だ。まったく、父上の周囲には美人が多くて羨ましいよ」
「聖職者に対してそのようなことを、殿下」
サリエルが呆れたように笑うと、アノルトは肩を竦めて見せた。
育ちと血筋のよさが滲み出る屈託のない仕草で、長兄である事実

を差し引いても、この王子が王位に最も近いことがよく分かった。
サリエルが執務室に入ってきた時、セファイドは数人の官吏と一緒に机に広げた都の地図を覗き込んでいた。
街の拡充に伴う水路の増設工事について、上がってきた案を検討しているところらしい。
セファイドはちらりと目を上げて、
「ご苦労。隣の部屋で頼む」
と短く告げる。
サリエルは一礼して、続きになっている隣室へ向かった。執務中のセファイドはいつもこんなものだから、特別不機嫌というわけでもなさそうだった。
隣室には円い大きな机があって、書類と本が乱雑に広げてあった。その周りをやはり本や帳面を手にした数名の官吏が取り囲んでいる。
「サリエル殿、ご足労頂いて申し訳ない」
官吏の1人が足早にサリエルに近づいてくる。
「私でお役に立てれば」
「こちらの書簡をご覧下さい。東のスンルー帝国のさらに北に位置する小国から送られたものなんですがね…」
官吏は卓上から紙の束を取り上げてサリエルに見せた。原文の写しらしく、あちこちにオドナス語の書き込みがしてある。
「香料の密輸容疑で捕えた商人が所持していた証拠品です。ほとんど国交のない国なので言葉の分かる翻訳官がいない始末で。スンルー語に似ている部分があって大体の意味は分かったのですが、細かい部分までは我々では…」
「読めます。書くものをお借りできますか？」
あっさりとしたサリエルの答えに、官吏たちは一様に安堵の表情を見せた。
セファイドが執務室にサリエルを呼ぶようになったのは、彼のこの卓越した語学力を認めたためであった。

旅の生活を送っていたから、という理由だけでは説明がつかないほど多数の言語を、サリエルはほぼ完璧に操れた。以前にやってきた西のカナク王国の使節団の通訳は、彼が口にするカナク語を聞いて、カナクに３０年は住まないとあんなに流暢には喋れないと言い切った。
そもそも、考えてみればサリエルはオドナス語をまったく不自由なく操っているのだ。
この才能に気づいてからセファイドは、国内の翻訳官がてこずる書面の翻訳や、外国人の客の通訳をサリエルに手伝わせるようになった。
結果としてサリエルはオドナスの外交についての重要事項を知るようになったが、国王は彼を信用しているようだった。楽師である彼は招かれた先々でごく私的な話を聞いているはずだが、それが彼の口から漏れたことは一切ない。
翻訳の誤りを数ヶ所指摘して、サリエルは短い時間で仕事を終えた。書簡の内容は、逮捕された商人の他にスンルー人を含め大勢の関与を裏付けるものであったが、彼がそれ以上詮索すべきことではなかった。
翻訳官らの羨望の眼差しをそれほど気にも留めず、謙虚に一礼して退室するサリエルをセファイドが呼び止めた。
「来月の月神節は知っておるな？」
「はい、建国祭でございますね」
オドナスの建国の日は月神節と呼ばれ、新年の祭りと並んで国内で最も重要な祝賀行事である。毎年王都と王宮には国内外から大勢の客が集まり、アルハ神への祭礼がたいへん賑やかに執り行われていた。
セファイドは疲れた体をほぐすように椅子の上で伸びをして、
「祝祭ではおまえに活躍してもらう場が多そうだ。キルケとともにな。よろしく頼む」
「仰せのままに」

オドナス随一の歌姫と楽師がようやく同じ舞台に立つ――そこにいる全員が軽い興奮を感じた。そして同時に、できることならその舞台を見逃さぬよう、自分が非番であることを切に願ったのだった。

「そこまで！」

教官の制止の声が飛んだ時、ナタレの突き出した木剣の先が、フツの首筋をかすめて背後の土壁にぶつかったところだった。

柔らかい土壁からぱらぱらと落ちた粉が、フツの肩に白く降り注ぐ。軽い木剣とはいえまともに食らっていたら失神しかねなかった勢いに、フツは口元を引き攣らせた。

ナタレは木剣を引いて、ちらりとフツを一瞥し、面白くもなさそうに背を向ける。

「今回の優勝はナタレだ。６度目だな。おめでとう」

剣術の教官の宣言に、生徒たちはざわめいて拍手を送った。みな同じ木剣を帯に差して、体のあちこちに痣を作っている。

ナタレとフツを含め３０人余りの生徒たちはみな属国からの留学生だった。武術の授業の一環で、月に一度ほどこういった勝ち抜き戦が行われていた。

同じ年頃の少年たちの中では、ナタレはどちらかというと小柄な方だ。その彼が６度も優勝しているのは、人並み外れた反射神経のよさと動きの素早さ、そして闘争心の強さゆえであろうと思われた。

あいつに真剣を持たせたら死人が出るぞ――と他の留学生が陰口を叩くほどである。

授業が終わり、他の少年たちが賑やかに談笑する中をすり抜けて、ナタレは独りで練習場を出て行った。優勝した彼に声をかけようとする者もいたが、ナタレは興味がなさそうに歩を進めるだけだった。

王宮に併設された留学生用の学舎である。ここで彼らは共同生活をしつつ、オドナスの学問と文化を学び、故郷に帰る日を待っていた。

実質の人質とはいえ客人である彼らの行動は制限されることはな

く、王都の街を自由に散策することも許されていた。ほとんどの留学生はその待遇に満足しており、オドナスの進んだ文化に傾倒する者も多かった。国王の計画はほぼ成功したといえる。
学舎の中庭を廻る水路で、ナタレは手と顔を洗った。王宮に近い位置にあるのでつまりは湖からも近く、水はとても冷たい。
「左肩、大丈夫か？」
背後からかかった声に、ナタレは驚いて振り返った。水の心地よさで、完全に気が緩んでいた。
ついさっきナタレが打ち負かしたフツが立っていた。左肩を押さえて痛そうに顔をしかめている。
「おまえが大丈夫か」
「やかましわ。思クソどついてくれたな」
試合中、先にナタレの左肩に一撃を入れたのはフツの方だった。次の瞬間、正確に同じ箇所を同じ角度で、しかも倍の強さで、ナタレに打ち返されたのだ。
「やられたら倍にして返せちゅうことか。ほんま恐ろしい王子様やで、おまえは」
ナタレは無視して、両手を振って水滴を跳ね飛ばし、その場を後にした。
「ちょ、ちょ待てやー！　話があんねん！」
喚く声が聞こえたが、相手にする気は起きず、ナタレは学舎内を通り抜けて裏庭に出た。

学友

裏庭はそれほど広くはないが、北の端が石積みの高い壁になっていた。人の背の3倍はあろうかというその高い壁は、学舎の敷地を越えて王宮まで続いている。

壁の一部に、積まれた石をそのまま利用した階段があり、かなり急角度のそれをナタレは楽々と昇っていった。

壁の向こうには、アルサイ湖が広がっていた。

王宮側の湖畔は、自然の波打ち際ではなく人工的に整備された石積みの堤防になっている。同じ大きさに切り取られた岩を、実に精緻な工法で組み上げ固めており、この岩は北方の山岳地帯から切り出し運んだものだという。

堤防の続き、王宮を越えた先には2箇所の水門があるはずだ。市中に張り巡らさせた水路の始点だった。オドナスが大国になり都に人口が増えることを見越して、現王が5年前に築いた水門である。水門は国王が選任した番人が守り、王都に効率的に水を供給している。

ぬるい風がナタレの黒髪を掻き乱した。

ここが砂漠の真ん中であることを忘れさせる光景である。

遥か彼方まで続く広大な湖面は、空の色を映してその色よりも深い瑠璃色に澄んでいる。午後の陽光を受けて小波がきらきと輝き、漁をしている小舟が数隻、かなり遠くに影絵のように見えた。

湖のほぼ中央に小さな島がある。緑がこんもりと茂った中に見え隠れする白い建物が、アルハ中央神殿だった。月神アルハを祀る神殿は砂漠に多数あるが、それらを統括する最高神殿があれだ。オドナス国内の信仰の要だという。ロタセイの民であるナタレにはあまりピンとこないのだが。

湖畔はごく濃い緑色に覆われている。宮殿の庭を彩るのと同じ、熱帯の植物が多かった。緑の葉の中に目に染み付くように鮮やかな

色彩の花も見える。湖の縁に沿って視線を流してゆくと、緑が薄く背が低くなっているところがあった。農地として作物を栽培している地帯なのだろう。

ナタレはよく1人でここへ来る。他の生徒たちが市中で遊んでいる間、ここでひたすら湖を眺めている。草原と砂漠しか知らないナタレが、都に来て初めて目にした水辺の風景であった。

今日も夕方からは王宮へ出仕しなければならないが、それまでの間、ここで何も考えずに水の匂いを楽しんでいるつもりだった。

ナタレは堤防の上に腰掛けると、服をめくって左肩を見た。少し赤くなっている。押すと鈍い痛みが走るが、腕は普通に動くので心配はないだろう。

確かめるように腕を回していると、下の方から無粋な足音が聞こえてきた。

「うわ、何やこれこの階段！　めっちゃ急やん」

騒ぎながら石壁を昇ってきたのはまたもやフツである。

1人の時間と場所を邪魔されて、ナタレは不機嫌になった。

「何だよおまえはもう！　こっち来んな！」

「へえ、ここ初めて来たわ。水が近うて気持ちええなあ」

フツはそう言いながら、腰に結んだ麻袋を下ろした。ナタレの不機嫌などどこ吹く風である。

「ほらやっぱり痣になっとるやんか、肩。これ塗っとき！」

袋から出した小さな瓶をぐいと差し出す。蓋を閉めているのに、濃厚な薬草の匂いが漂った。

「うちに伝わる秘伝の塗り薬や。打ち身切り傷、何にでも効くで。俺も塗ってきた」

「そんなもん塗るか。いいからほっといてくれ」

ナタレは困惑して顔を背けた。

この図々しく賑やかな学友が、ナタレは苦手だった。学業は今ひとつだが腕っぷしは強く、いつも学生たちの中心にいる。優秀だが他の皆と距離を置いているナタレとは対極にいる存在だった。

いつぞや王宮の中庭で掴み合いの喧嘩になりかけたこともあったが、それはフツが相手に対する悪口を決して陰では言わず、相手の目の前で言うからだ。
フツのそういうところが実はナタレは嫌いではない。嫌いではないが、苦手だった。
「おまえなあ、何でそんないつもツンケンしとんの？」
フツは両手を組んで、勝手にナタレの隣に座った。
「自分以外、みんなアホやと思とるクチやろ。あかんでえ、そういうんは」
「うるさい、関係ないだろ。何しに来たんだよ」
「この前のこと謝ろ思て――おまえが王宮に取り立てられたこと、悪う言うてすまんかった！」
彼はいきなり勢いよく頭を下げて、ナタレはまたもやびっくりした。本当にこいつは苦手だ。
「え、ええ？」
「今日おまえに負けてよう分かったわ。おまえが抜擢されたんは優秀やからや。小ずるい手ぇで王に取り入ったわけとちゃう」
フツは顔を上げて照れ臭そうに顎を掻いた。
「いやほんまは前から分かってたんや。でもだから悔しくておまえのことやっかんどった。俺は器のちっちゃい男や。許してくれ！」
「いや、あの…」
ナタレは何と答えればよいのか分からなかった。あまりにも率直な物言いに毒気を抜かれた感じだ。
「…別に怒ってないからいいよ。フツはいつも俺のいるところで悪口言うから、その時は腹が立つけど後には残らないよ」
「ほんまか！？」
フツの顔がパッと輝いた。
「悪口は本人の目の前で言えいうんがうちの家訓やねん。陰でヒソヒソ陰謀を企てるんはヒンディーナの性に合わへん」
「それでよくオドナスと戦争できたなあ」

ナタレは思わず吹き出した。ヒンディーナとは砂漠の北方にあるフツの祖国である。
「せやから俺がここにいてん」
「確かに」
妙に堂々としたフツの口調に、ナタレは続けて笑った。つられるように、フツの顔も緩んだ。
「何やナタレ、おまえ笑たら可愛いやん。いっつも怖い顔ばっかしとるけど、笑た顔の方が絶対ええて」
「ううるさい」
ナタレはわずかに頬を赤らめてそっぽを向いた。少し前に楽師からも言われた言葉だ。嫌な気分ではなかった。こうして同年代の相手と話をしたのは何ヶ月ぶりだろうか。
フツはにやにやして、麻袋から陶器の瓶を取り出した。蝋と紙でできた蓋を外しながら、
「こないだ街に出た時に仕入れて来たんや。やるか？」
「これ…酒か？　学舎への持ち込みは禁止だろ？」
「固いこと言うなや。田舎では飲めへん珍しい酒がごろごろしてんねんで。せっかく都に来てんのに勿体ないやんか」
彼は瓶に直接口をつけて、中味をあおった。
「うっ、きっつー」
「当たり前だ。それ、砂糖黍の蒸留酒だろ。普通は水で割って飲むんだよ」
「そうなん？　よう知ってんな」
ナタレは溜息をついた。成人するまで飲酒を禁ずるロタセイの戒律を守って、彼自身はまったく酒を口にしないものの、王の侍従見習いを務めるようになってから知識だけは身に着いた。
「ほんまに飲まんか？」
「遠慮しとく。夕方から出仕なんだ」
残念そうに、フツは再び瓶を口に持っていった。さっきのように勢いよく流し込んだりはしないが、やはり生のまま飲んでいる。

「しっかしナタレはいつも落ち着いとるよなあ。やっぱり王太子はちゃうわ。1つ年下とは思えへんし」
彼は堤防に沿って垂らした両足をぶらぶらさせながら言った。妬みではなく純粋な羨望の響きの混じった声だった。
「俺なんか王族いうても端っこの方や。王位継承権でいうたら14位やで」
そんなんでよくオドナスが留学許可したな、と言いかけて、さすがにナタレはやめた。あまり人質としての価値がないのではないか。ロタセイに課された和睦の条件はあくまでも王太子を差し出すことだったのに。
おそらく人質の重要度はその国に対するオドナスの信用に反比例しているのだろう。フツの国ヒンディーナは造反の危険がほとんどなく、対してロタセイは、とても危険だと判断されている。
沈黙してしまったナタレを気遣うように、フツはその顔を覗き込んだ。ナタレは我に返って軽く首を振り、
「王太子に選ばれたのはたまたまだよ。俺も兄弟は多いし…でも責任は感じてる。オドナス支配の中で国をどう守るか、考えなくちゃならない」
「へーえ、偉いんやなあ」
フツはまた一口飲んで小さくゲップをした。
「ヒンディーナはな、鉄鉱石の鉱山がちょこっとあって製鉄技術を持ってるくらいの小国やん？　せやからオドナスみたいなでかい国の傘下に入ってむしろよかったと思てる。鉄製品がばんばん売れるようになったしな」
「…悔しくないのか？」
「まあちょっとは」
ナタレの生真面目な表情を、フツは人懐っこい笑みで迎えた。
「責任取らされて首はねられた王族もおるしな。でも実際に民の生活は豊かになったし、オドナスはそうキリキリ締め付ける国とちゃうやろ。名捨てて実取れや」

「そういう考え方もあるか…」
「俺の位置は国に帰ってもたいしたことないけど、この機会に王都でなるべくたくさんの留学生と仲良うなって、将来うちの鉄製品を買うてもらうんや。ロタセイにもやで」
ナタレは立てた膝の上に顎を乗せて苦笑した。自分とはまったく違う捉え方ながら、能天気に見えるこの少年も必死に努力している、そのことが分かったからだ。
他の皆もそうなのかもしれない。国を出て都にやって来て、不安と迷いの中で、国のために何ができるのか一生懸命答えを探しているのかも。
フツは大きく息を吐いてごろりと堤防に寝転んだ。
「ああっ、でもそうやった！　東のスンルー帝国で新しい鉱山が見つかったんやった！　めちゃデカいんが！　そんなん輸入されたらヒンディーナ負けてまうわ」
彼の手から酒瓶が転げ落ちそうになって、ナタレは慌てて受け取った。半分ほどになった中味が零れぬよう蓋を閉め直して、
「スンルーの鉱山の石と鉄製品なら、もう見本が国王の元に届いてたよ。こないだ見た」
「やっぱり取引するんや」
「いや…国王曰く、石の質が今ひとつで精錬技術もまだまだだって。だからヒンディーナは焦らなくていいと思う。これまで通り製鉄と加工の職人の腕を磨かせるように、国に知らせてやれば？」
途端にフツが飛び起きて、いきなりナタレに抱きついた。
「ナタレ！　おまええええ奴やなー！　恩に着るで」
「離れろっ、臭い！」
アルコールと肩に塗った薬の匂いに辟易しながら、ナタレはフツの体を押しのけた。
「もう俺行くから。着替えて出仕だ。おまえは酔いが醒めるまでそこにいろ」
服の土を払いながら立ち上がる。さりげなく、フツの持って来た

塗り薬の小瓶を手に取った。
「これ…いちおう塗ってみる。ありがと」
「…おまえと友達になりたいと思てる奴、俺の他にもぎょうさんおるんやで。今度話しかけられたら、無視せんと笑てみ」
酔っているのかどうなのか、優しげな眼差しを向けるフツにナタレは口元を歪めた。笑みが浮かびそうになるのを我慢している。
「おせっかいありがとう。俺もひとつ」
「何や？」
「おまえ訛ってるぞ。外交がしたいのなら公の場では直した方がいい」
「うそん！？」
本気で衝撃を受けるフツに笑いかけて、ナタレは堤防の階段を駆け下りて行った。
自分でも不思議なほど、気持ちも体も軽くなっていた。

いつも通り正装に着替えて王宮に出仕すると、ナタレはさっそく執務室に向かった。
国王侍従とはいえまだ見習い身分の彼の仕事は、主に雑用である。夕刻のこの時間には王の執務はほぼ終わっているので、仕上がった書類を分類して担当の官吏に渡し、使い終わった文具の手入れと補充をしてから部屋を片付ける。余裕があれば、翌日の王の予定についての連絡会に出席することもあった。
正式に侍従に任ぜられれば、実際に予定を管理したり大臣や官吏からの取次ぎを受けたり謁見の順番を調整したり、より重要な仕事が任されるようになるのだろうが、果たしてそれまで自分がここにいてよいものかどうか、ナタレにとって悩ましいところではあった。
今日は珍しくまだ執務が終了していないようだった。
先日から騒ぎになっていた密輸事件の証拠が挙がったことで、急遽、御前会議が開かれることになったらしい。税務担当大臣と交易品の捜査官が執務室に集まってきている。

慌しげな先輩侍従を手伝ってナタレが椅子や机を動かしていると、セファイドが手招きをして彼を呼び寄せた。
「…ひとつ用を頼む」
さすがに疲労の滲む声だった。会議の始まるまでのわずかな時間、椅子から立ち上がって体を伸ばしている。
「アノルトを呼んできてくれ。会議に出席するようにと。王宮のどこかにいるはずだ」
「かしこまりました」
ナタレは短く答えて一礼した。
セファイドは穏やかに笑って、
「剣術の模擬試合でまた優勝したそうだな。学舎の教官から報告が上がってきた」
「は…はい」
「よくやった。これからも励めよ」
と、ナタレの背中を軽く叩いて椅子に戻った。
ナタレは反応できずに体を強張らせていたが、すぐに大きく頭を下げて、それから急いで部屋を出た。
何だか物凄く複雑な気分になっていた。自分が留学生の中で優秀さを示せば、それはそのままロタセイへの評価に繋がると思っていた。だが今、国王に誉められて、まず感じたのは個人的な誇らしさだった。
自分が努力して得た評価に対して、単純に嬉しい――そんな心の動きに、彼自身が戸惑っていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5667z/

砂と水と月の国で

2012年1月14日19時54分発行